



江戸名所圖會

十七



五條

岡

武藏國風土記殘篇曰 豊嶋郡下谷岡貢鹿 狢 狸 山 鴿 雉 等 又

川原北条の古文書云 六谷十藤 鹿 狢 狸 山 鴿 雉 等 又

五條天神宮 東叡山の巽の麓 瀬川氏の比とあり 祭神 少彦名命

一坐 本朝諸道の祖神 北野天満宮を相殿とす

當社より東叡山のうらまあり 一の寛永寺 草創の御師連

歌師 瀬川 昌億の宅比と遷す せらる

の夜 白木神事を後行す

北國記行云 正月の末 じく せら ぬの 出 二 儀 遊 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

五條天神と申す 折る 枯る 茅原を焼く

響りをとて せら ぬの 出 二 儀 遊 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

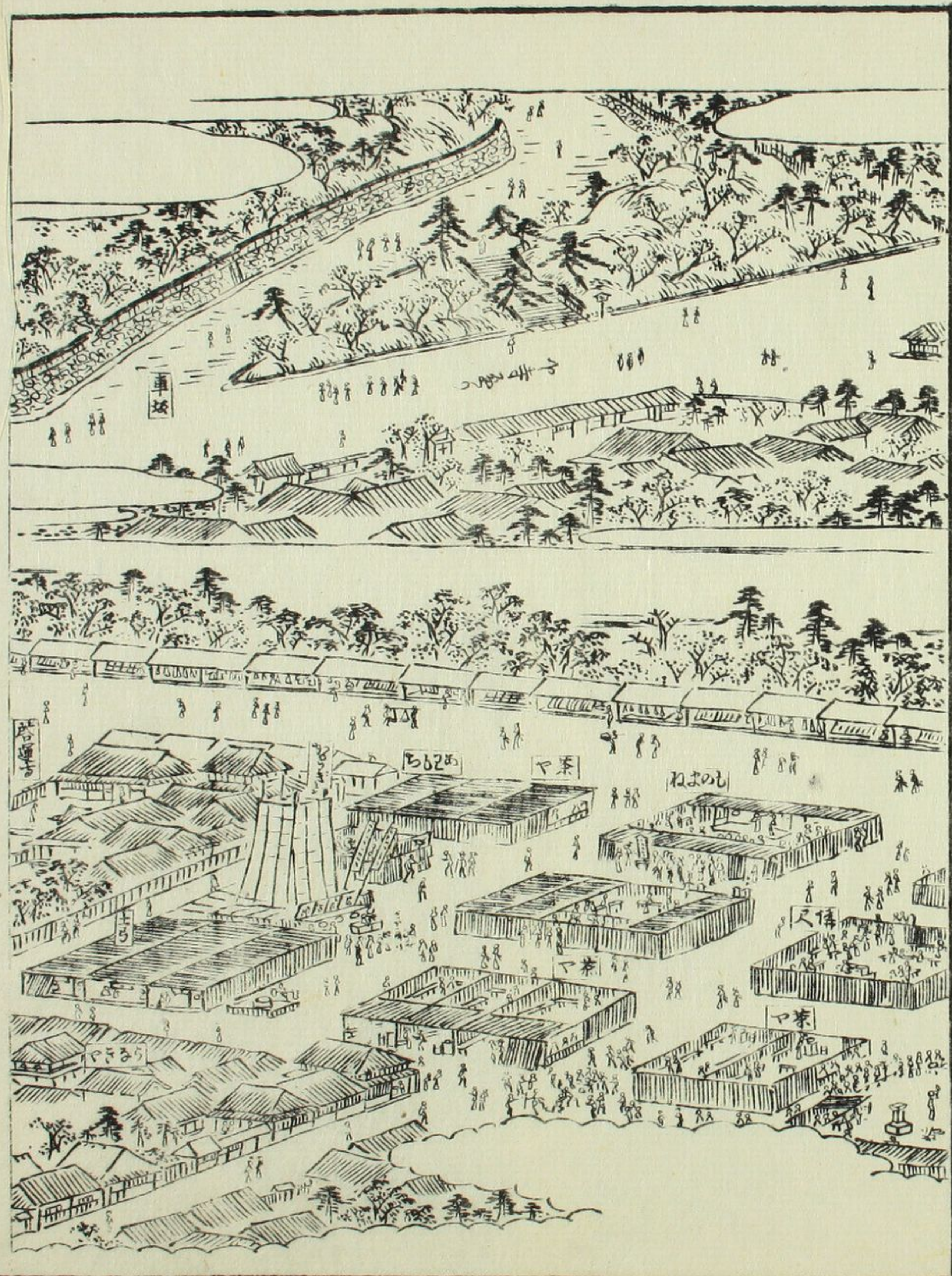
宝王山常樂院 長福壽寺と号す 天台宗 五條天神の南 忍川の向

又あり 奉養 阿弥陀如来 行基大士の作り 二 六 阿弥陀 茅五番目

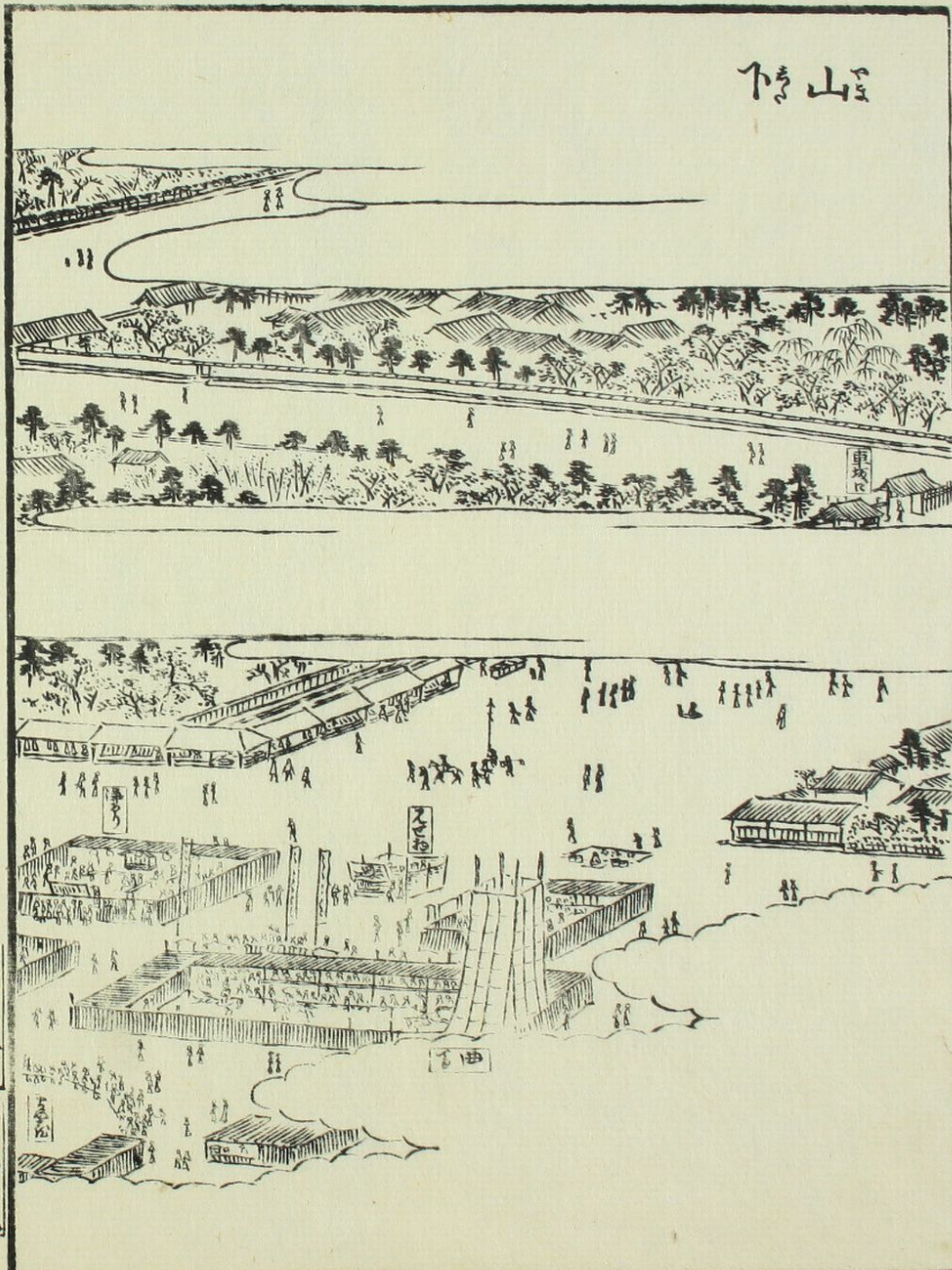
里二月八月の彼岸中 甚振り

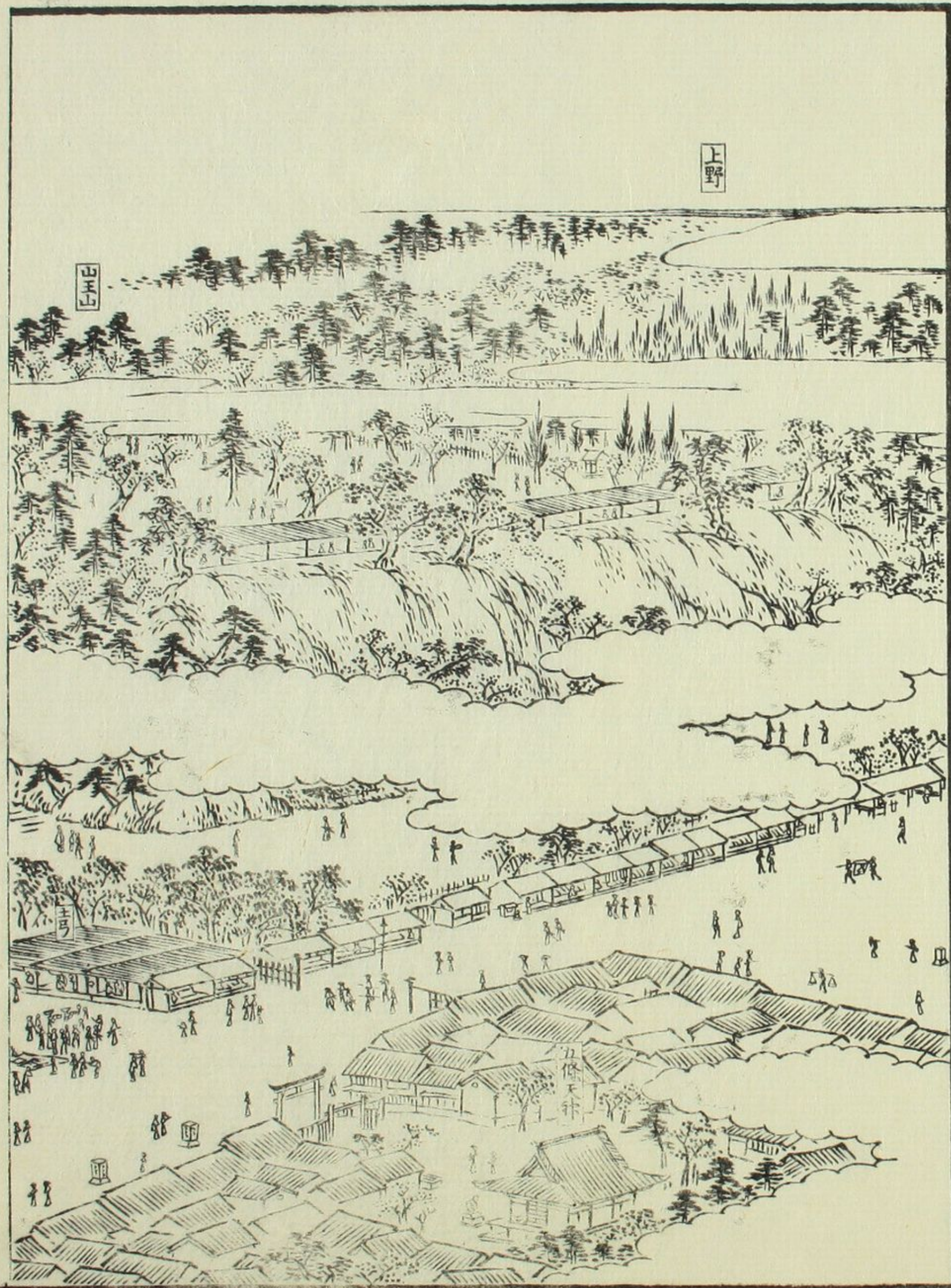
五條

五條

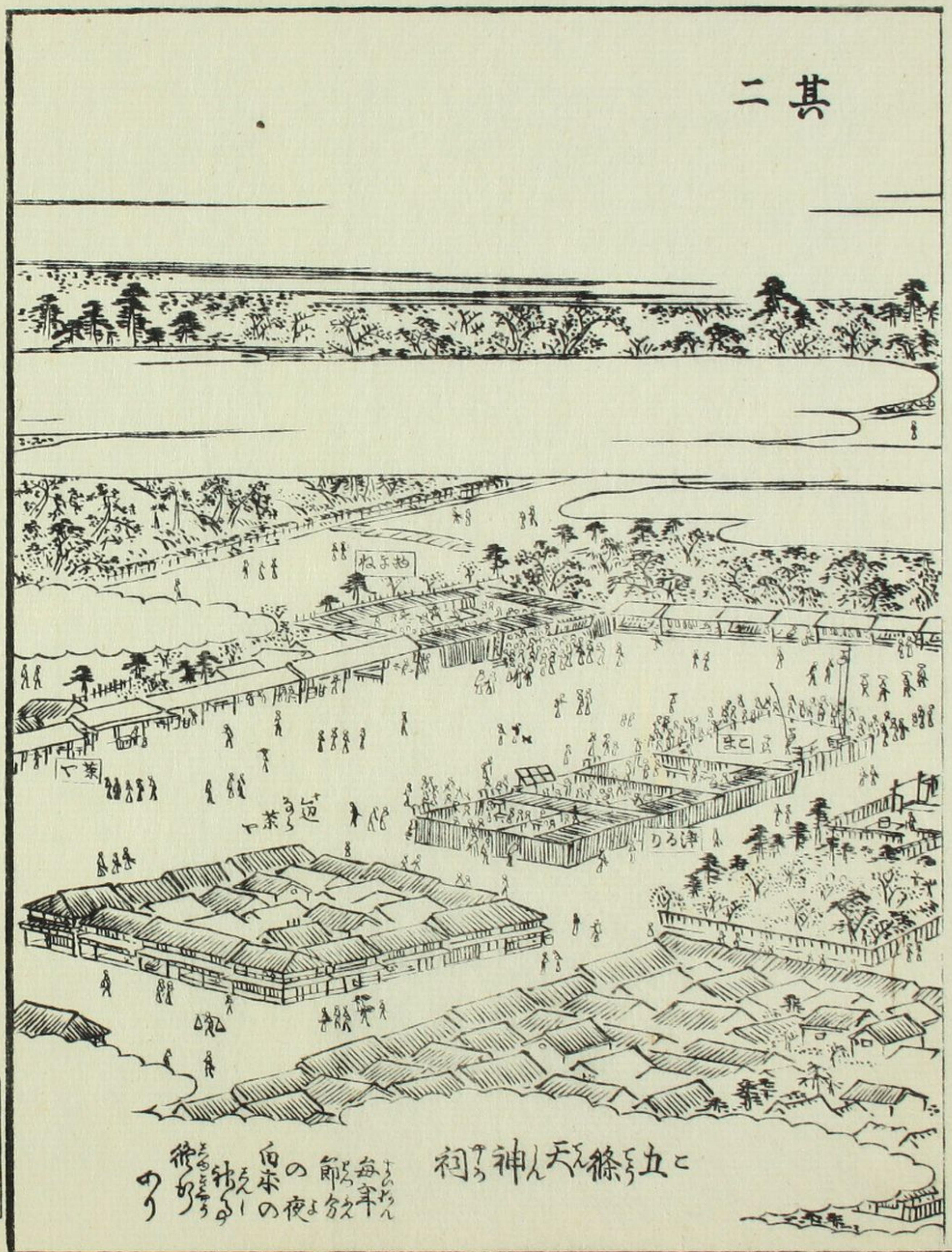


下山

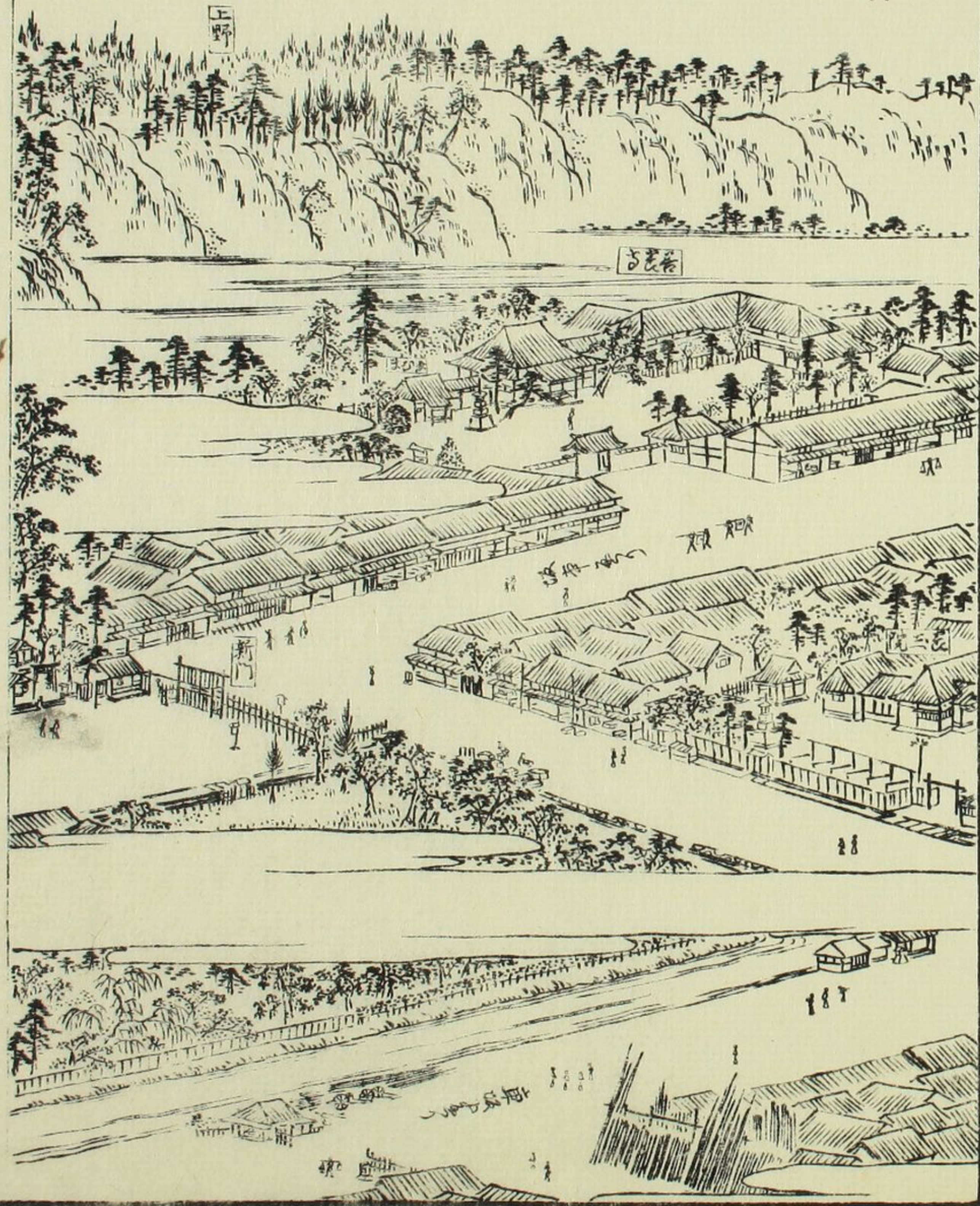




二其



東麓山坂本



常樂院

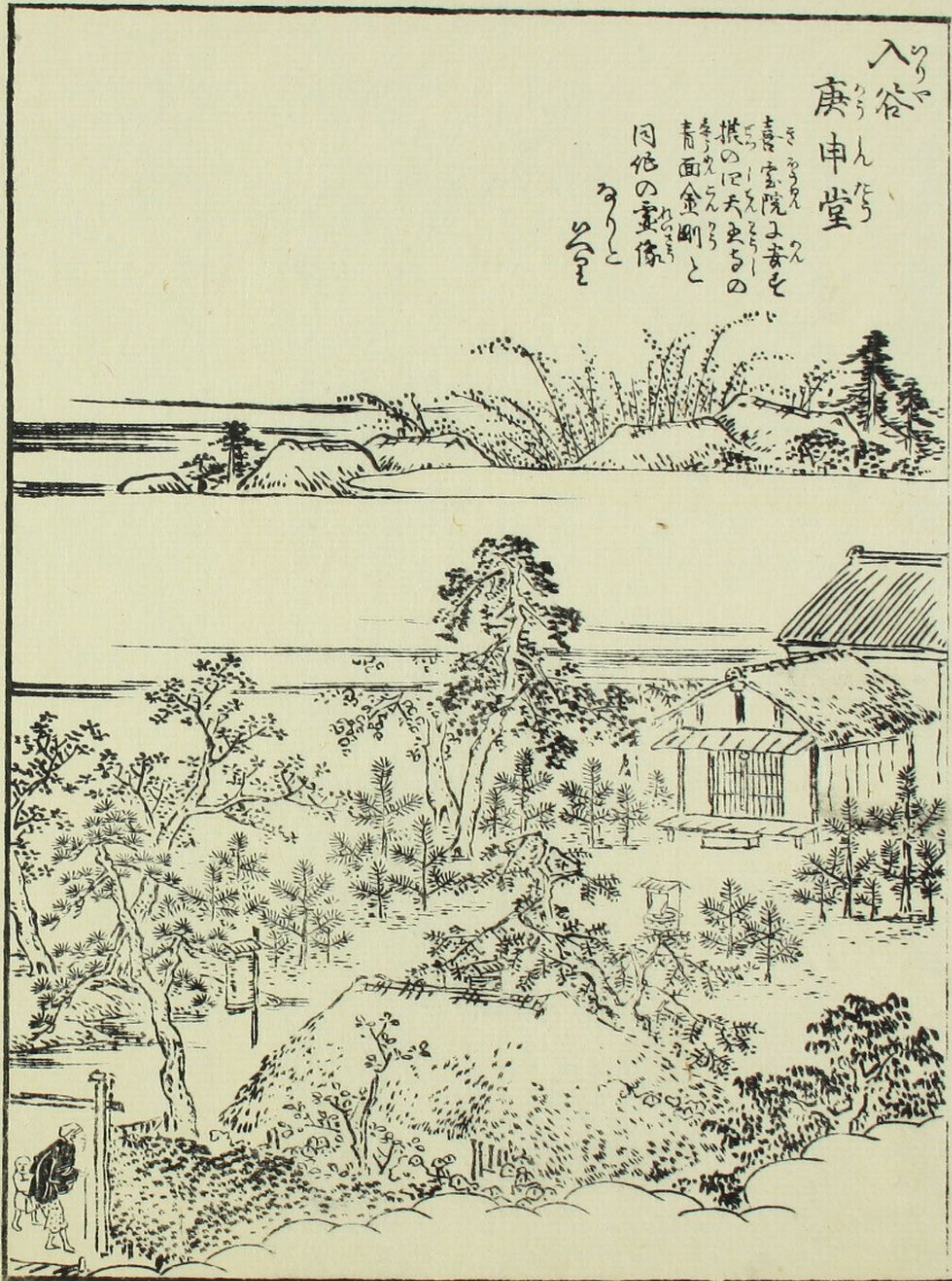
六阿弥陀五菩薩  
ありて秋二夜  
の祇園中賑わい



入谷

庚申堂

喜宝院に安を  
撰の匠夫史の  
青面金剛と  
同位の重像  
ありと  
なり



金光山艱王院

下谷坂

本壹丁目

の南

あり天台宗より往昔今

の御境内大手の辺りよりありと慶長の頃今の地より遷りて往

右の三藐院と号するを宝永年間今の名に改むとつり當寺は釋迦

の涅槃像の画軸一協を藏と上は慈眼大師の瀆あり二國傳燈大

僧正天海書とあるなり毎年二月十五日是日津とむ

藥王山善養寺

延壽院と号す

同不坂本壹丁目の左側あり天台

宗より奉尊の藥師如來を安と

當寺は天長年中慈覺大師の草創奉るも同大師

の作りといつて額に圓滿の二字を刻と黄壁本庵老人の筆あり

境内に圖魔堂あり圖玉の像の運慶の作り正月七月十六日奈

諸羣集と

小野照崎明神社

同所三丁目の右側あり奈神奈儀小野翁の

靈ありといつて社傳あれとも詳れらるる始より累を當社の坂

奉の鎮守りして八月十九日を以て祭日とて別當の天日宗りて

小野山嶺松院と号すと  
 或人云其社の其先是り出まを堂あり一頃その傍にありて小野の社と稱す小野の傍に  
 備校を崇敬し所別是利子學を校を開く故に其後彼地にて有るの傍に其の傍に  
 其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に  
 其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に  
 其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に其の傍に

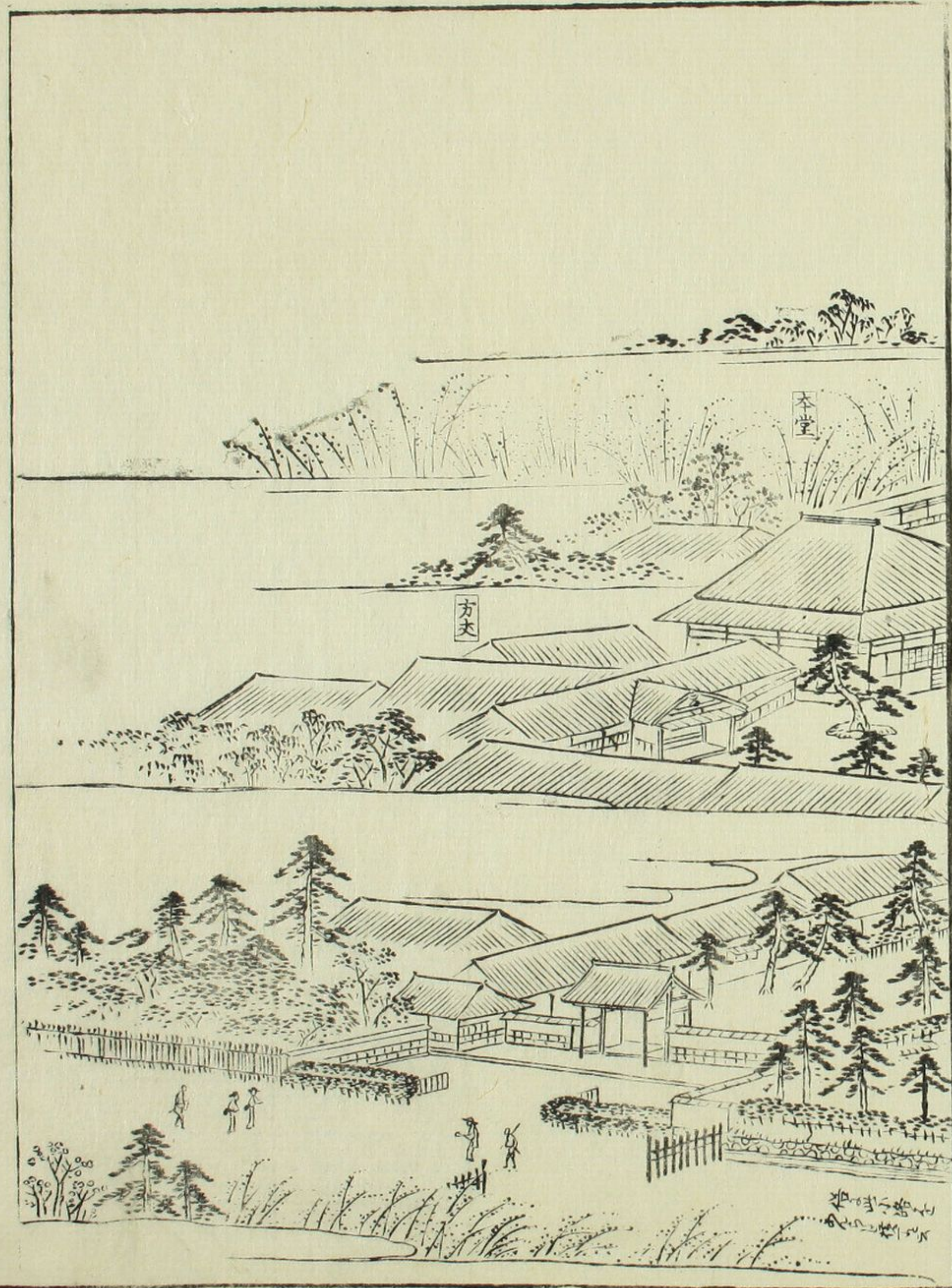
佛迎山安樂寺 金松あり正保年中云蓮社意的和尚當寺を創  
 奉尊の寶冠の阿弥陀如来より洛陽  
 一心院の末より一捨世一流の淨域なり昼夜不退念佛三昧あり

珠傍あり  
 寶鏡山圓光寺 根岸の里あり濟家の禪林あり釋迦如来を

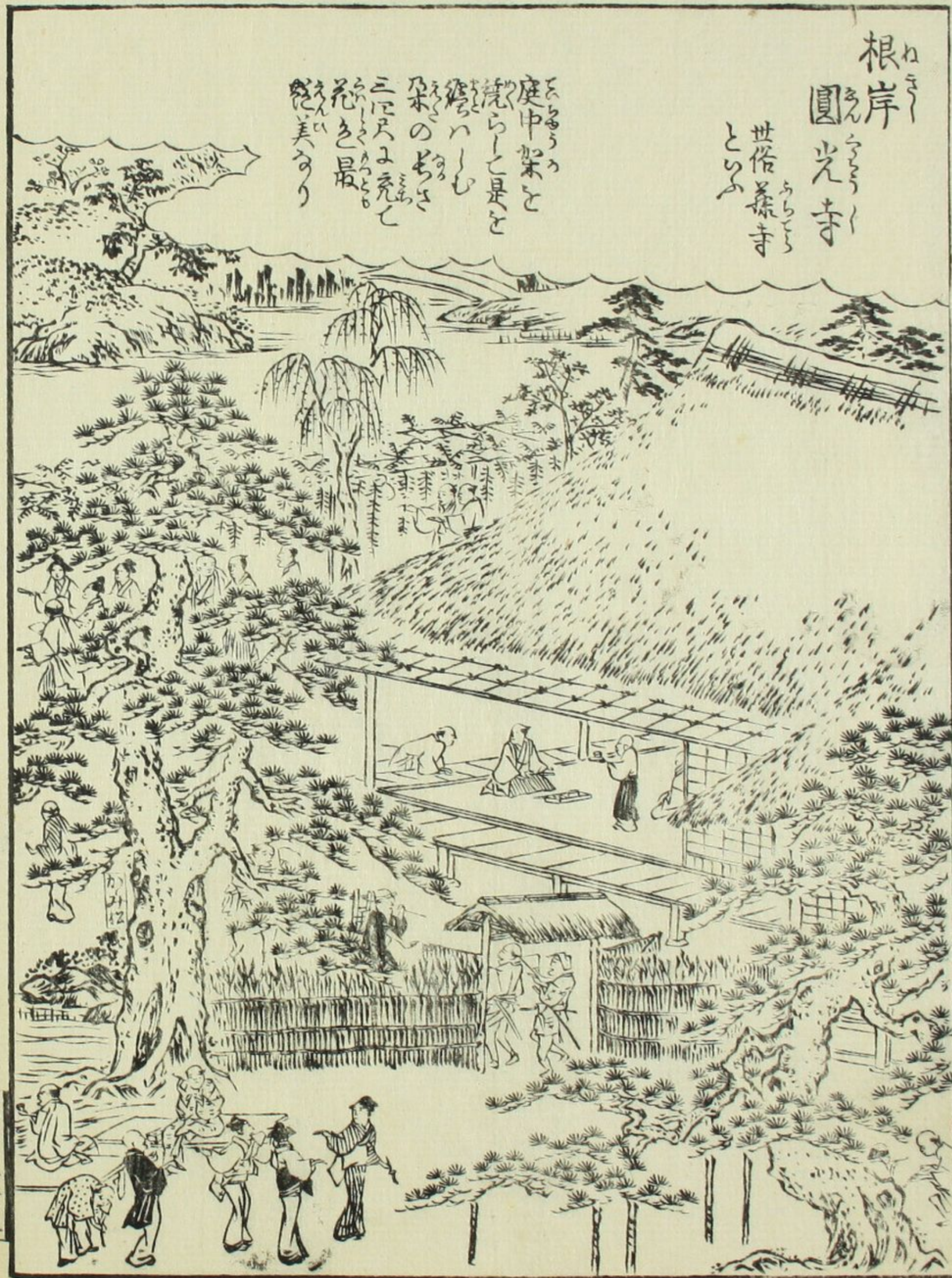
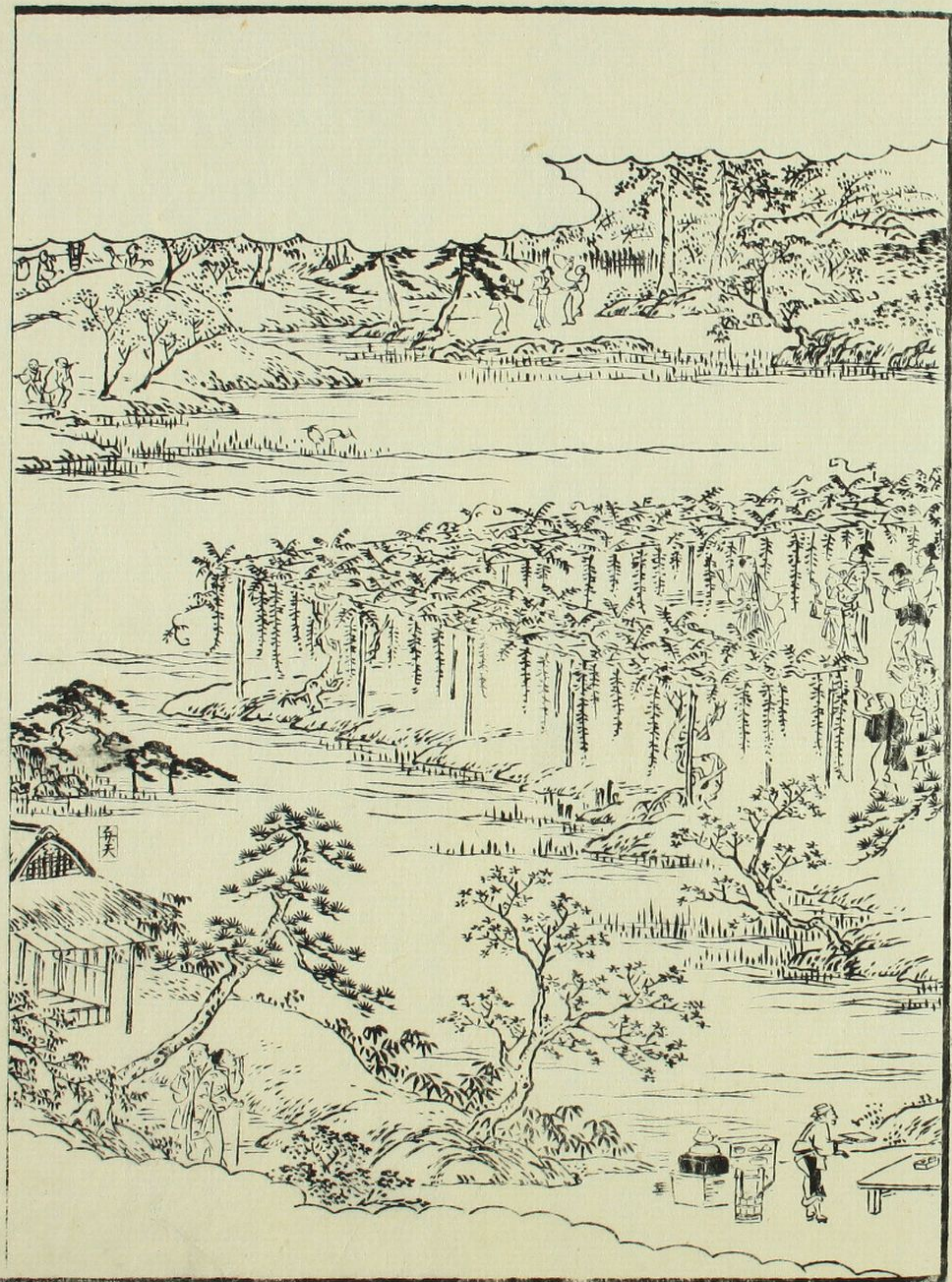
奉りて當寺庭中小松蓑ありて花の頃ハ一奇觀なり其好む倍  
 向あれは蓑寺と稱せりまに堂前鏡の松と唱ふる名樹あり  
 鎮守の辨財天ハ弘法大師の作なりといへり

小野照崎の神社









根岸  
圓光寺

世俗  
とゆふ

庭中架と  
総らしは是と  
花の色最  
三日月を  
花を最  
美あり

時雨岡 岡野庚申塚と云るより三四丁良の方小川は傍より一株

の古松のりとは不動尊の草堂あり土人此松を御行の松と号す由

始くらすは省畧とて 一小時雨の

田圃雜記 多々の岡と云るをよと松原のありある

ゆつとやとて

霜の後あらはれ小なり時雨をいよの罍の松もひれ 道真准后

按て其の罍と云ふは東嶽山の旧名なり此松も東嶽山より連綿たれし田圃雜記より

東陽山正燈寺 龍泉寺所よりあり妙心寺流の禪刹なりて承應三

身は愚堂和尚草創とて 和南の太田室濠園師と謚号するを天性明敏なりとて大に 當寺

の後園桐樹多し 其先山崎高雄山 晩秋の頃ハ詞人吟客ら小群遊し

其紅艶を賞と

真覺山西光寺 義輪新所よりあり浄土宗なりて長和元年の草創

なり奉旨の門陀陀如未ハ惠心僧都の作并山ハ聖蓮社賢譽上人たり

千束郷 龍泉寺所の辺今僅の地をいふと一は條堤と字と菊岡

古涼の説は此地を依り律見の里とも号くとある誤なりとの境

叢初あり千束編芥と稱と

或人云往古の上よりこれに後草天正所の辺より子位の橋際迄をいふと子未をといひたりと云  
仍て昔は後草天正所の邊の路に武品豊島郡子東の之を金龍山後草天正寺とあり又同  
境内に西宮橋と稱するあり里老傳へて是を上子東編芥と号ると云り田原水菜の  
夜交書より東の内より河伏の三つ石の濱等の地をを田原六郎河原石原の地をを  
四大橋真同金杖の地を飯倉禪正忠同近藤の地を島津弥七郎同朝倉倉分の地を  
江戸番匠等領とると云ふは其地の廣大なることを云ふ

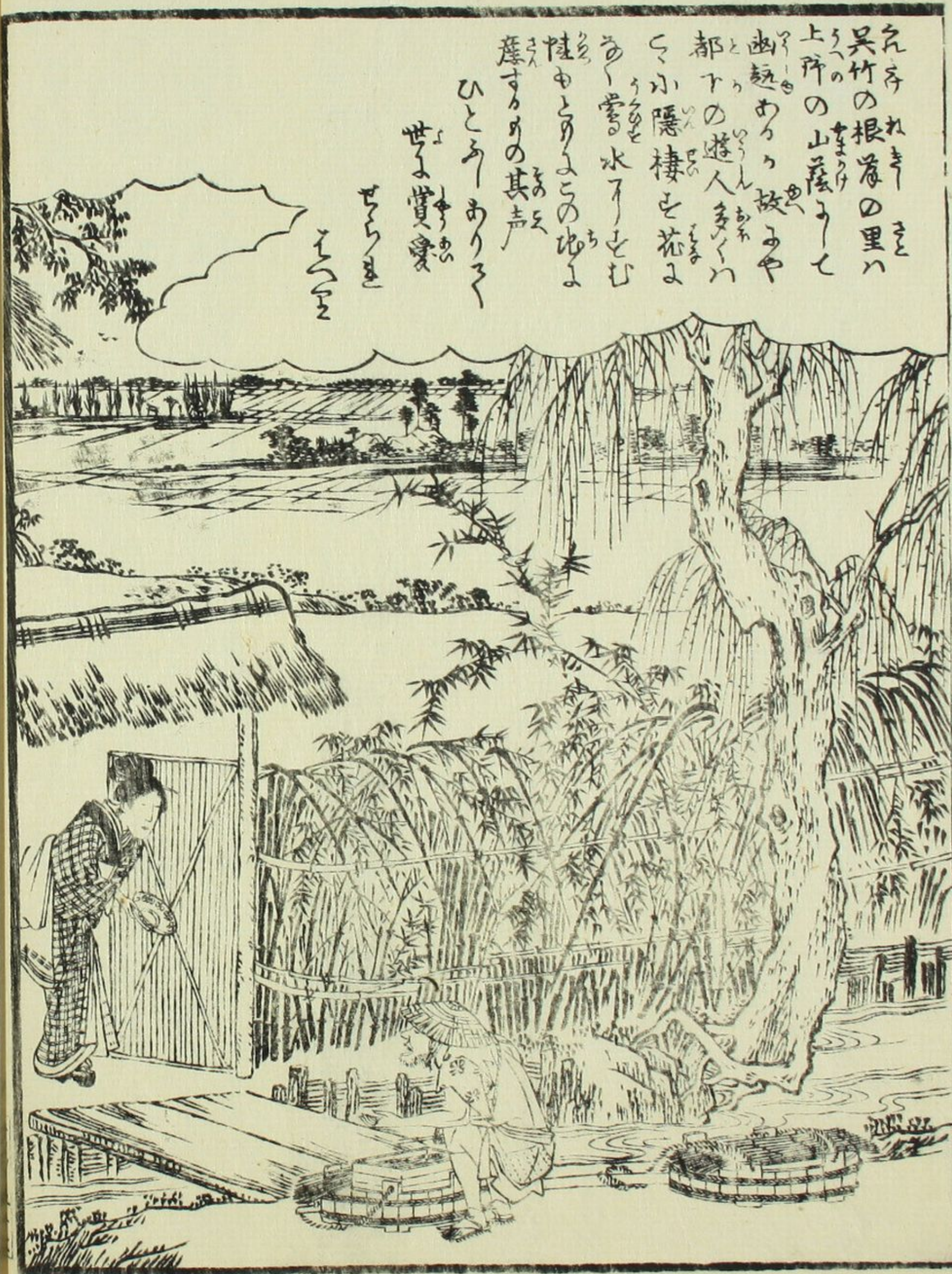
本戸三河守源孝範茅宅舊跡 傳云今三河嶋と稱する地の三河守居

住の舊跡あり故よと号する

孝範家集云 此の國と云ふと云り那よ入れありて居たりりり  
中へのりやと云て後て鹿の常よりなをさるる山をさるるれめりりしく  
園と云ふより近れありて故人のありて住たり夜ふけのめさすりてすたすくと  
まらばらうたすは夜ふけの物をさすりてなれともすりて人の声  
あとのとをたを園れと申すやとあらしをさすりてさすりての

曉のふれありするあけの子のあひと云りをさすりてすらん

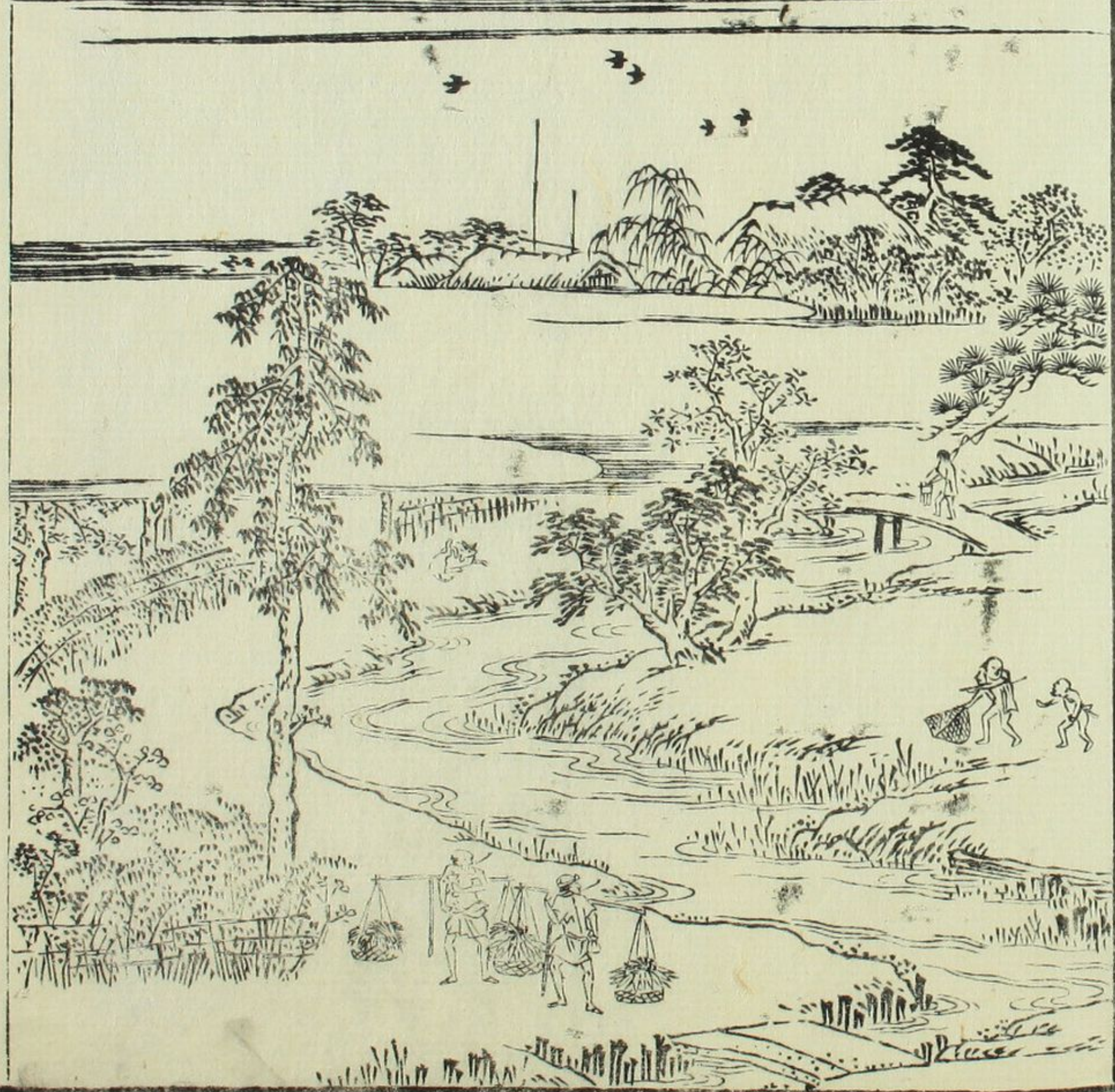
返



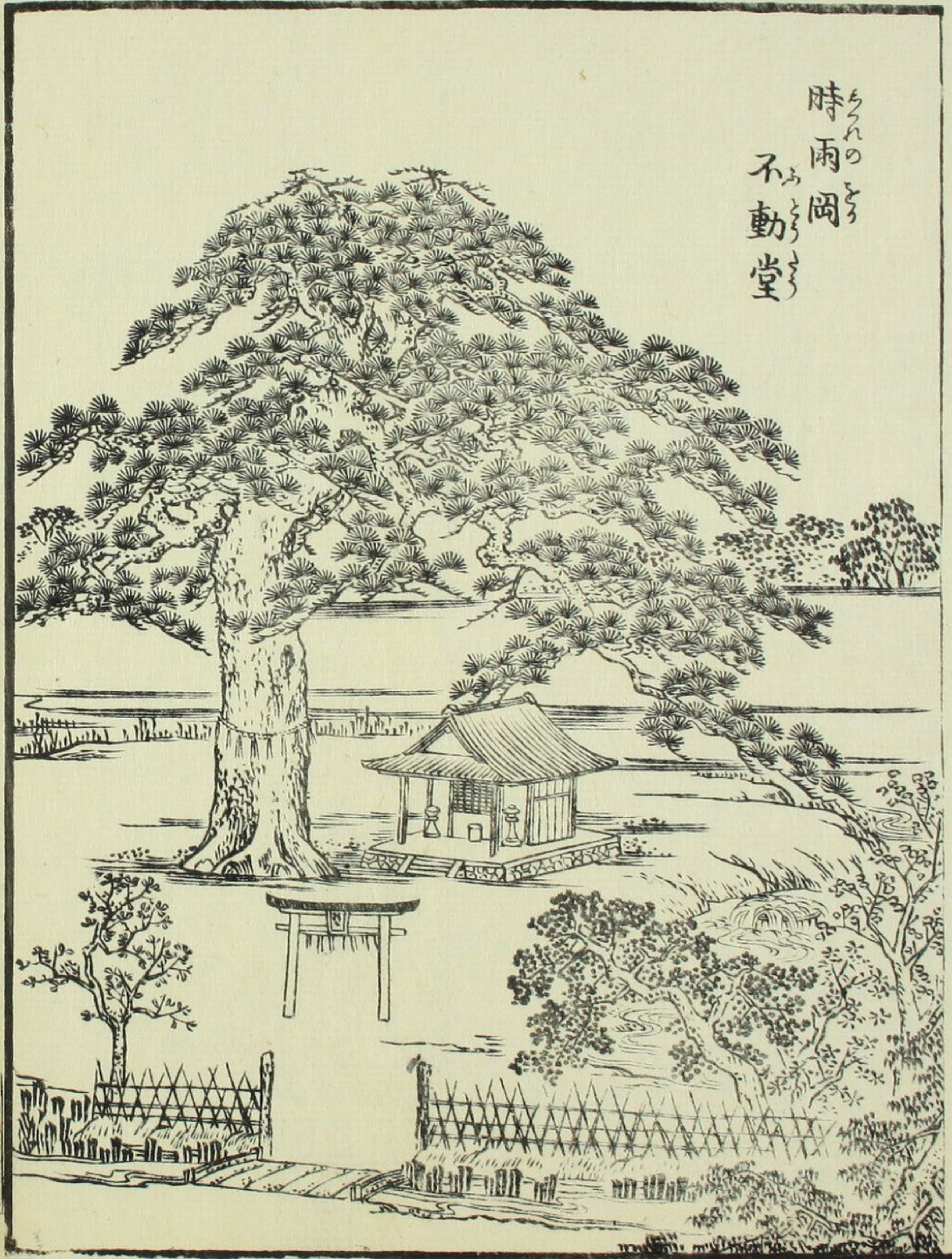
名存れきり  
 吳竹の根巻の里ハ  
 上所の山蔭よりて  
 幽趣あり故や  
 都下の遊人多くハ  
 小隠棲を花よ  
 り雪氷をむ  
 陸中よりこの地よ  
 産すりの其声  
 ひとみありそ  
 世に賞愛  
 せらるる

いづれ

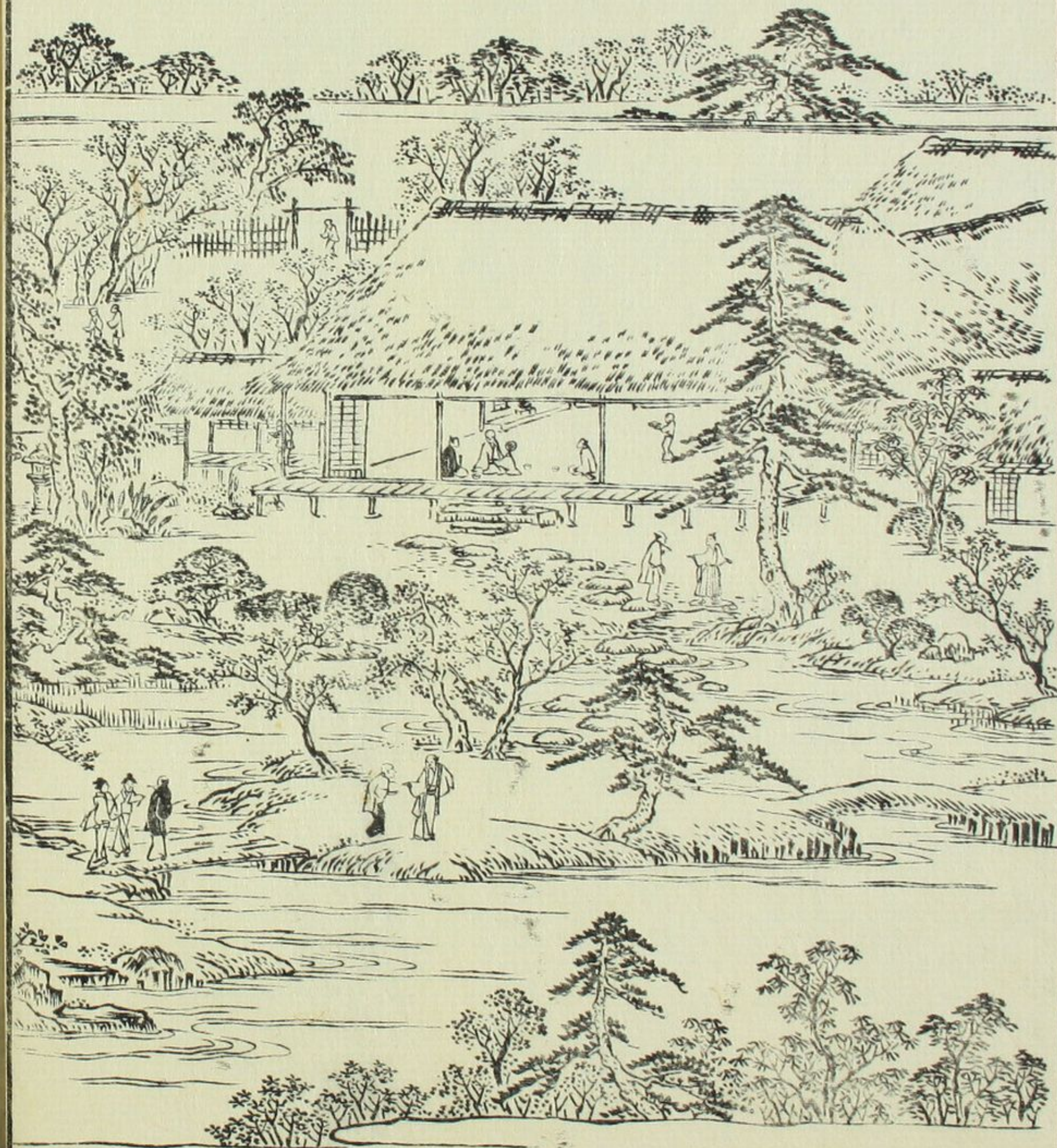
田國雜記  
 雨相の後  
 あつらふま  
 かり  
 時雨の  
 岡の  
 松も  
 うい  
 道真准后



時雨の  
 不動堂



寺正燈の丹楓



庭中楓樹寂  
暮れくさくさ  
晩秋の紅錦ハ  
海晏寺の園林  
も亦る色あり  
實一時の  
奇観  
なり



軒近きまろまろと宿とひく待一夜のあひよともさけ

梅花無盡藏云 木戸公号罷釣翁保和歌之正脉

余在洛而葦殿聲譽久之矣今也共寓武野之佳  
境隅田之上流往還無虛月豈非天之至幸乎昨  
賜詠歌三篇可謂暗投也聊奉攀末篇之韵脚云  
二月十六日 天明二十七年也  
雪月寧非老年伴 一吟聊答數篇韵  
隅田春色浪花 鳥若知都棧細問

梅子孝範の事武野園豊嶋といふ形入江りける所は住みたり乃のあはれり  
孝範の詩の序に本公を罷釣翁と号し其は武野の  
佳境隅田の上流又寓まるといふ合せ孝範の三行邊の地をの跡跡といふ

本戸孝範ハ從五位下ノ叙一前二行守ト云又罷釣翁ト号モ今川  
不俊ノ一族ヨリ古田道灌東常縁及ハ正徹宗祇公致万里杯  
ト同時世ノ人ナリ藤倉大草紙又孝範ハ冷泉中納言持お御ノ  
門弟ヨリ古田ノ哥人ナリトあり同書又長祿元年實東ノ礼ヲ  
付テ京都將軍家ノ舍弟ヲ馬頭政智實東將軍ノ宣旨ト云  
下向のこつゝの条下ニ供奉の人の中ニ此孝範の名あり  
貞範建武二年

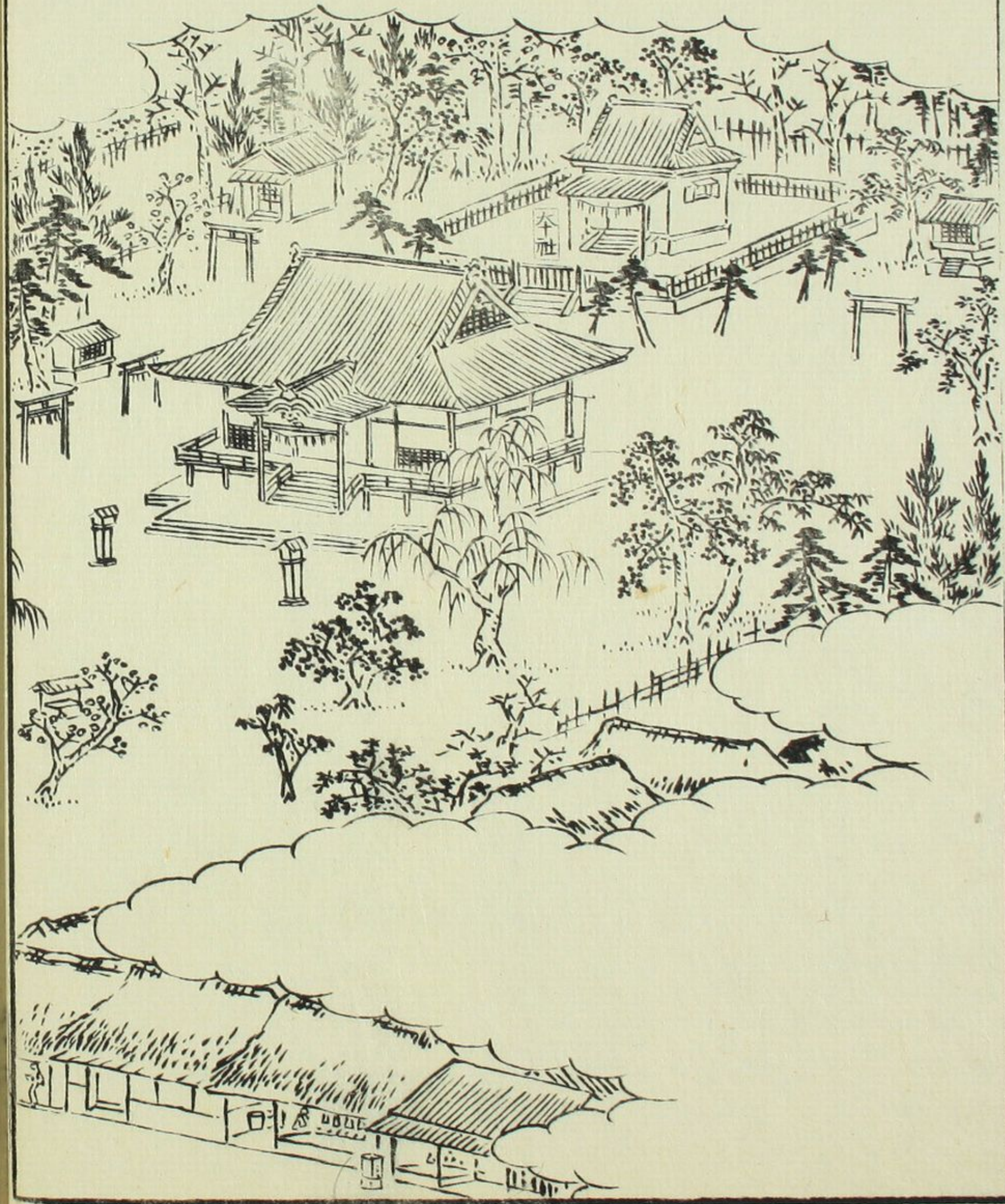
藏人よりた近の世にありて眞陸の美を修し其賞よりて昇殿と云るさうり  
藤倉大草紙に永徳二年氏備山義政退治の由發向とある条に先母の  
大おの中ニ本戸孝範ト云名を擧ぐ同書後永徳二十三年憲基の  
旗に記すこと云孝範ハ其族の一人ありては孝範を考へ  
本戸孝範の事と云る名を往り行れり其族の一人ありては孝範を考へ  
萬里居士寓居地 前記に記すこと云孝範ハ其族の一人ありては孝範を考へ  
萬里居士寓居地 前記に記すこと云孝範ハ其族の一人ありては孝範を考へ

萬里居士諱ハ端九初花洛の萬年寺入大主和尙ニ從ふ其法  
を受く禪機文材ありて名譽四方ニ揚る應仁の乱を避て仁左濃尾の  
間ニ寓と後浮屠の業を廢る自際補居士ト号し又一ニ梅花無盡藏  
と稱と文明の末東武ニ遊る方田道灌養遇甚渥一権殺して後濃  
小歸王老を扱と曾て天下白二十五卷を著と文明中東遊の詩文集  
あり梅花無盡藏ト号く

藝田明神社 新鳥越小あり祭る所日本武尊一坐り當社ハ往古  
鳥越の地あり一正保年中今の所ニ移り例祭ハ隔年六月十日  
執行と

駿馬塚 同所南例竹某り別荘の中ニあり傳云康平中原義家東征

山見  
熱田明神社

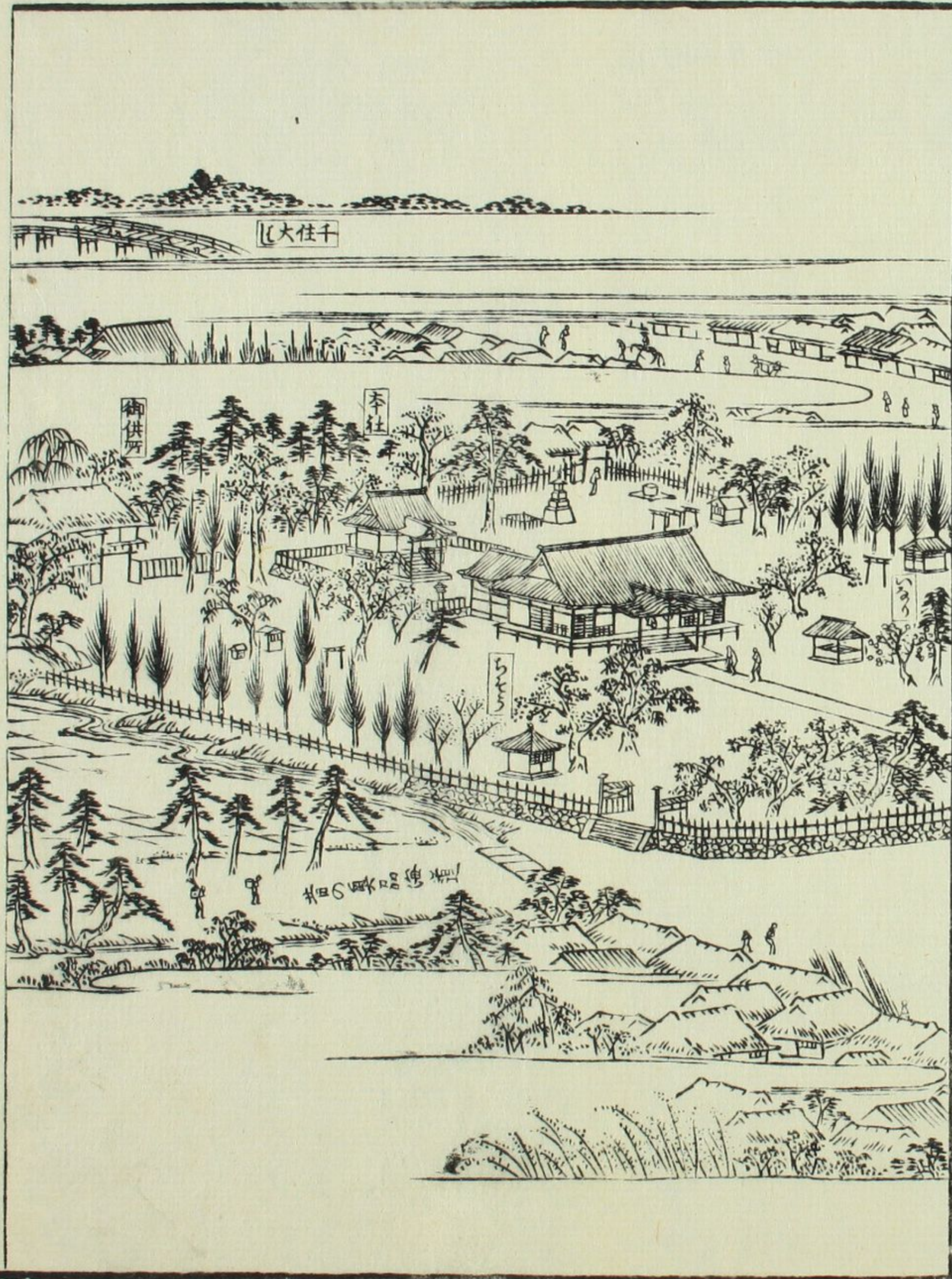


駿馬塚



の時毛よる石の青海原とよる駿馬偶病して小幣を公大よ思を  
 傷とて朽骨を驛路の傍に埋めめんと其後里民小祠を覺と  
 建といふ又近き頃其地のあり公の明德を子歳の下に顕さん  
 工と欲して塚の側より石碑を建て祠に其塚の東の方より  
 飛鳥明神社 小塚原あり此地の産土神とて四人混して兼輪の  
 天王と称せり 列歩のを護院宮未とて荊石山神と稱すとす  
 祭神大己貴命 日本紀古語拾遺等より大己貴命の 事代主命 右事記より事代主命の  
 二坐あり 社傳曰往右延曆年中比叡の黒松師東國化度の初此地に  
 至る小小條の茂るなる一堆の小塚あり 此塚より此地を 其塚より夜に  
 瑞光を現し白衣を着たる二人の公稱荆棘生たる石の上は降臨あり  
 黒松師より曰く我の素盞鳴命の和龜大己貴命なりと 此社牛頭  
 又一人の公稱曰く我の事代主命なりと 此神と号せ 云々仍て忌殺謁  
 仰し清浄の池を撰むて此神以一社に奉すと 此神と号せ 牛頭天王の毎歳六月二日より  
 日九日すて子住大橋の南侍より





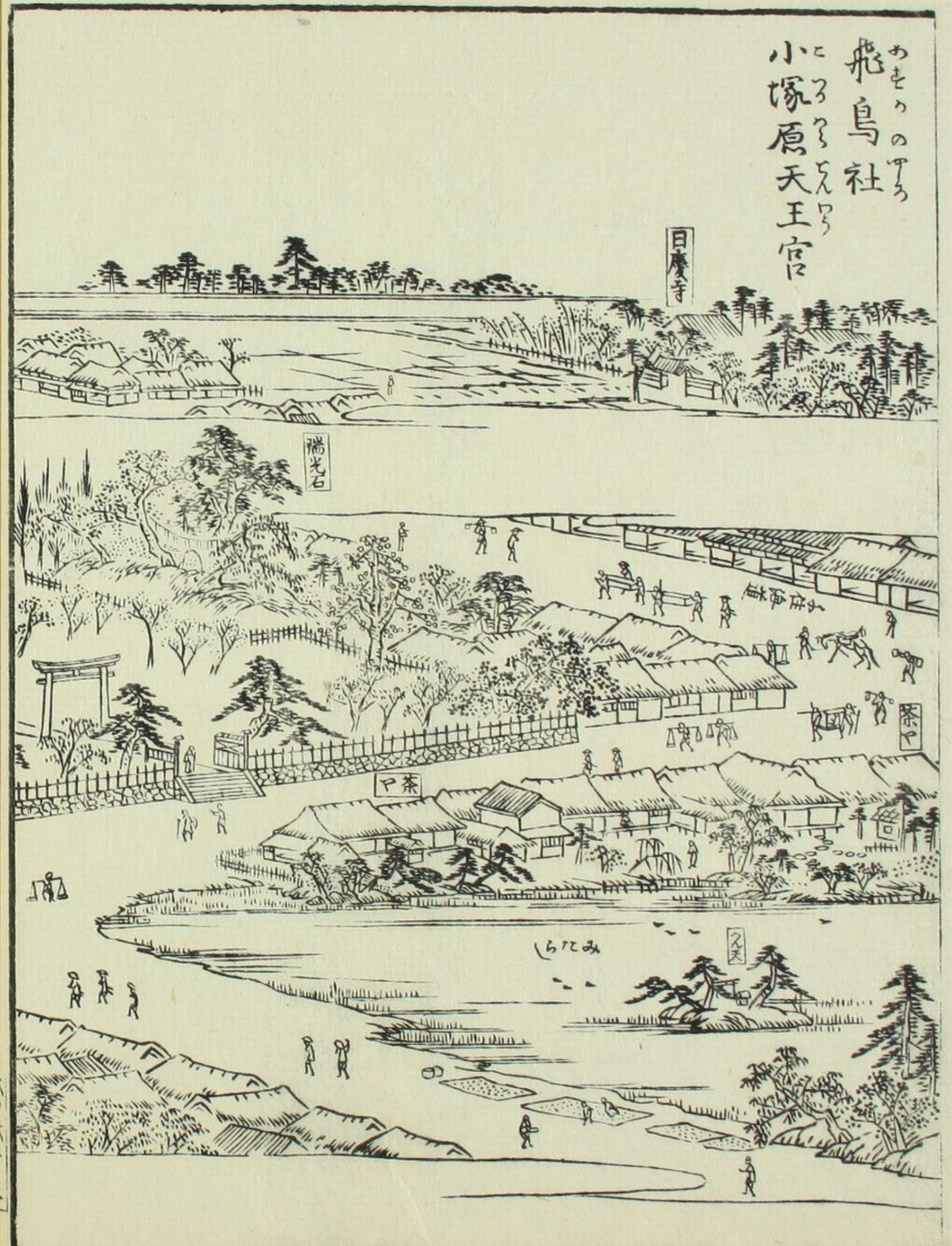
千住大

御供所

本社

御品品品

あまのつら  
飛鳥社  
こつらえん  
小塚原天王宮



日慶寺

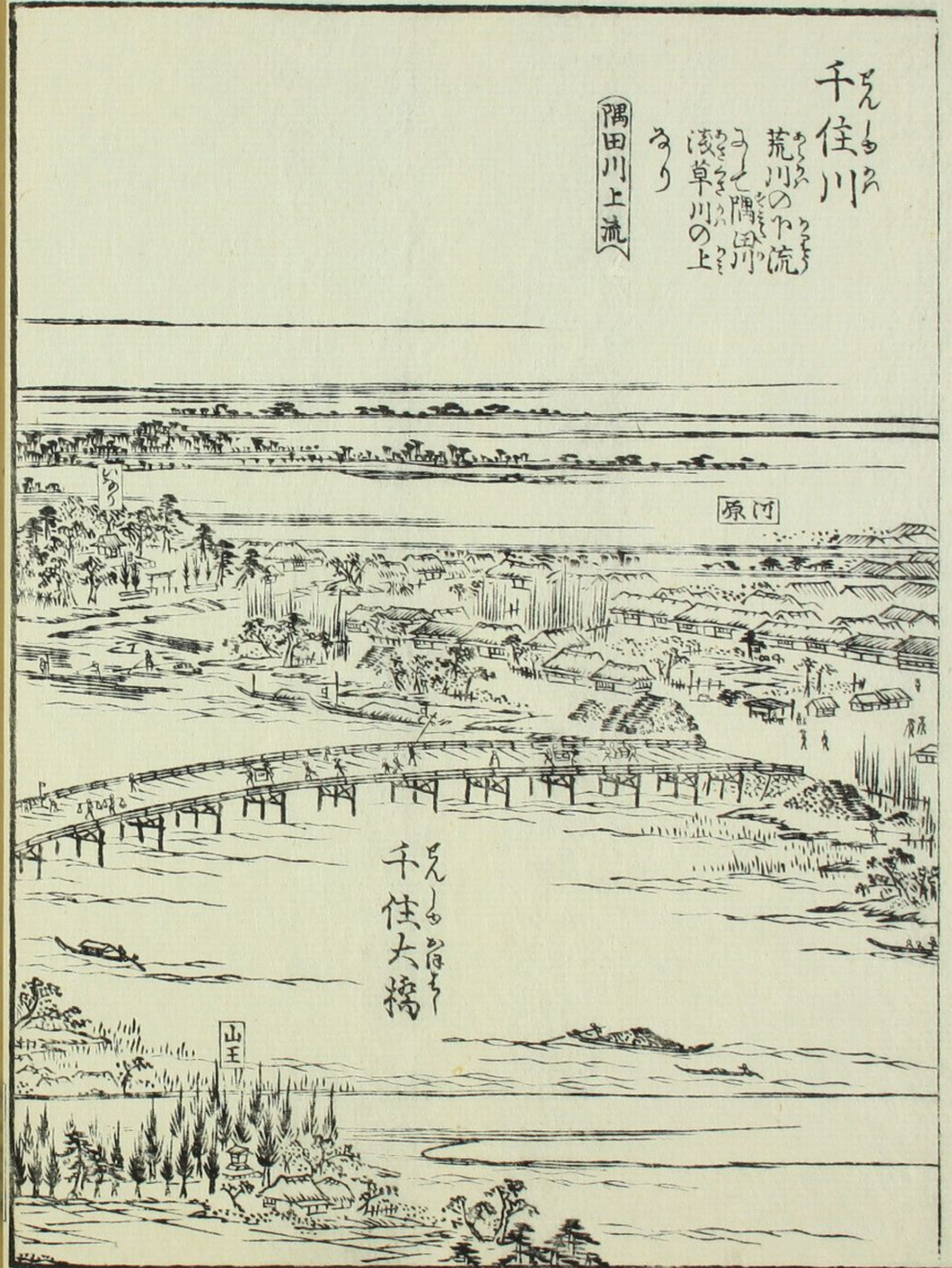
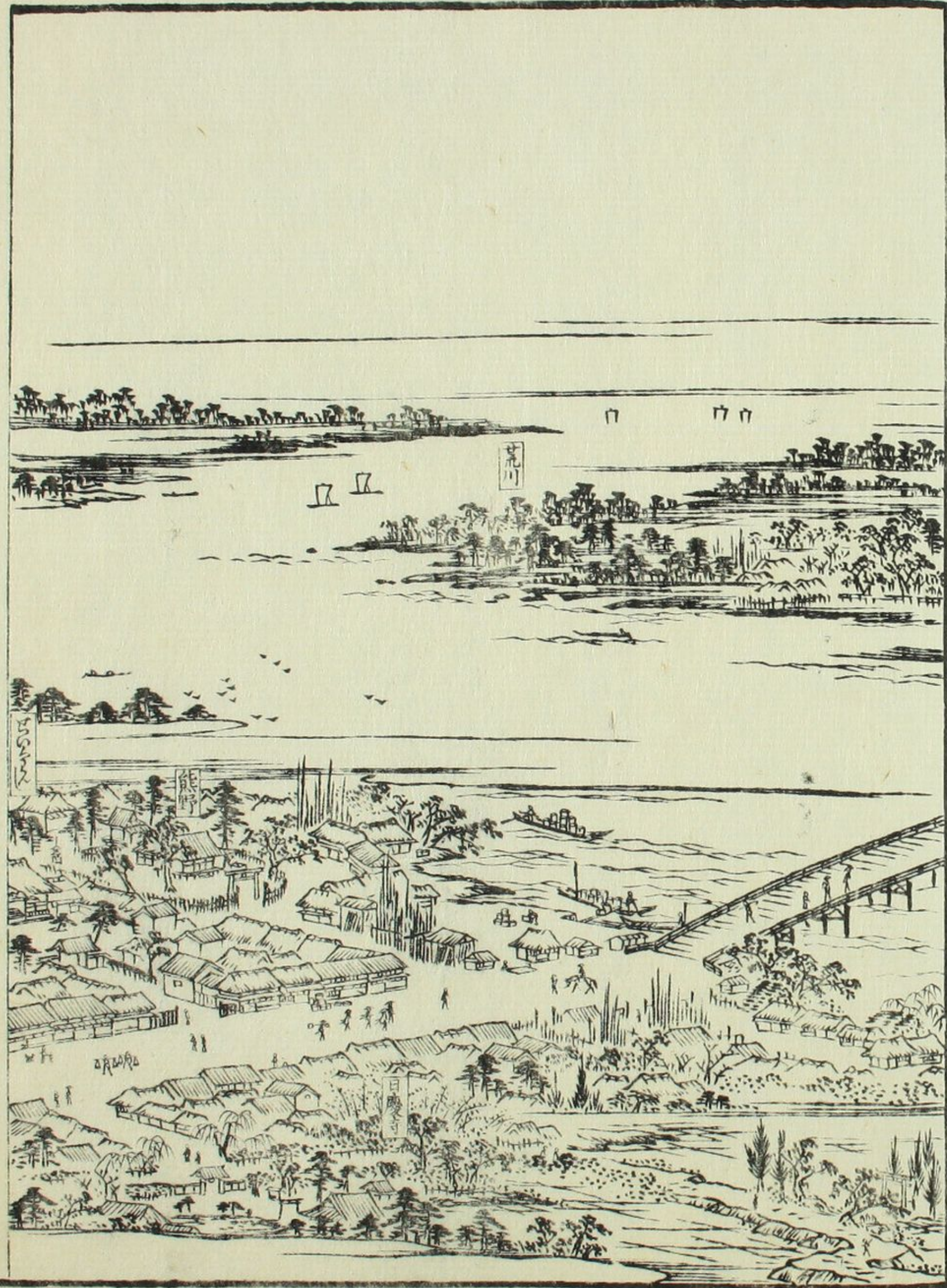
瑞光石

茶

み

天





千住川  
 荒川の下流  
 千住川の上  
 隅田川の上  
 隅田川上流

千住大橋

原河

山王

熊野権現社 同地の方千住川の端より祭神伊弉册尊一坐社傳云

永兼年中義家朝臣貞朝征伐の時此地より灯を添へんとす

奇異の靈階あり故に燈籠に安んじ紀州熊野権現の神幣を此地に

とめて熊野権現と稱してまつりしり

千住大橋 荒川の流に架き奥州海道の咽喉あり橋上の人馬ハ絡繹

として間断あり橋の北壹貳町を經る沢舎あり此橋ハ其始文禄二年

甲午九月伊奈備前守奉行とて普請ありしり今も連綿たり

甘露山延命寺 應味院と号し下沼田より真言宗の右刹として

行基大士の草創あり奉尊阿弥陀如来ハ同作りて六門弥陀茅二番

目とて春秋二度の彼岸より奉請多し

富士浅間祠 同所川下の深林の中より土民傳云昔此地より足立莊司

より宮城宰相といひる者あり一女子をとりて名附るは足立姫といひ

才四番兩縁起より豊島を創つ所備光の女といふ二番目縁起より沼田社司の女といふ

三番目五番目をより六番目縁起より足立從二位宰相藤原正成の女といふ

嶋右衛門尉ありちり者ありとて城にりめんとして

外此より故に是より隨つて父母強き誓願を誓ふといひとも從此よりを始り

患へり其荒川より入るを又沼田川とも云ふ住川の侍女も又とも身を投て死

り仍莊司悲歎し絶て又村人彼女子等の行跡のたゞりてを稱し其日

六月朔日のゆゑありとて其靈を富士浅間と稱して一社に奉すといふと

ゆれとも其説未詳

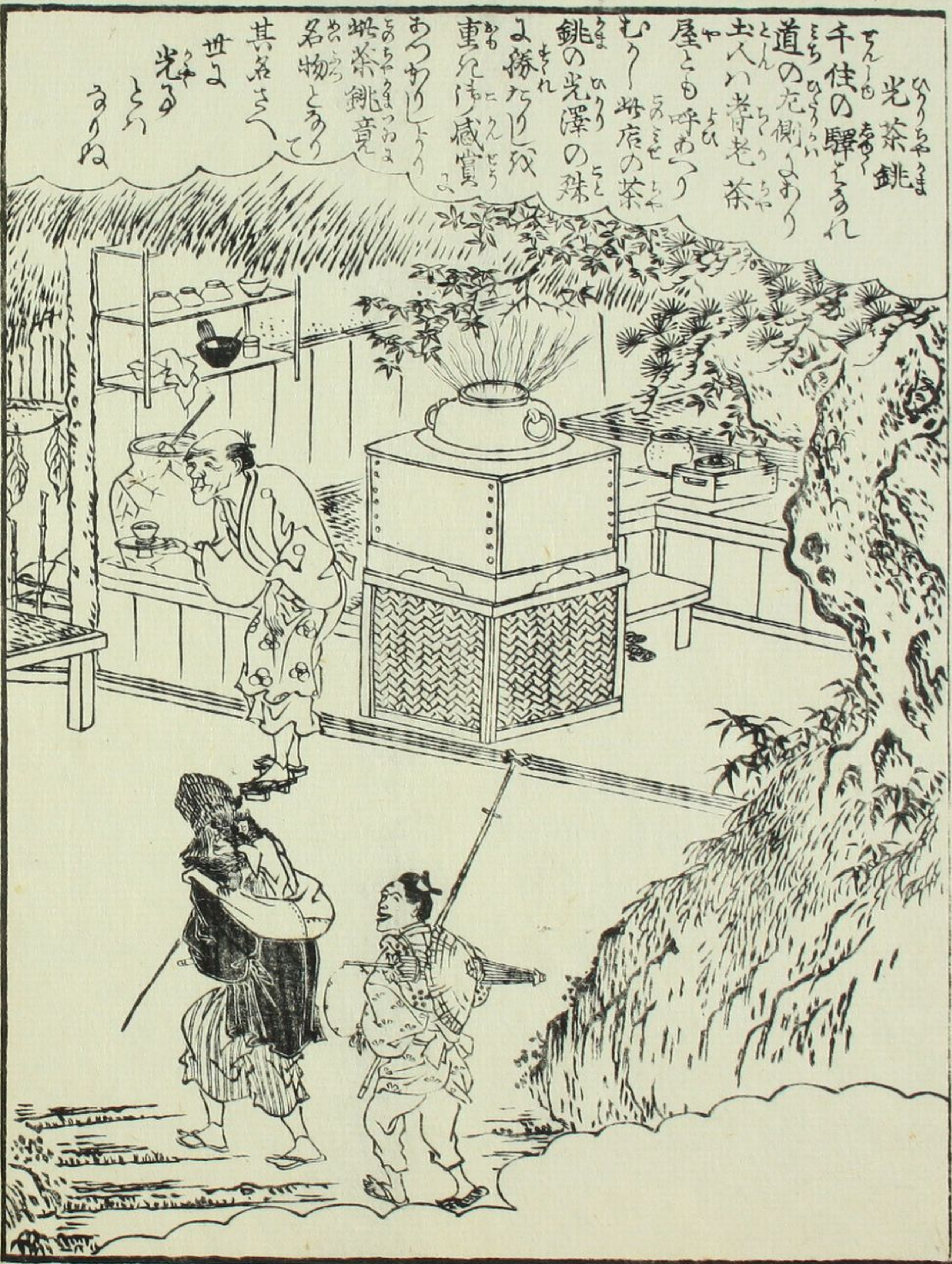
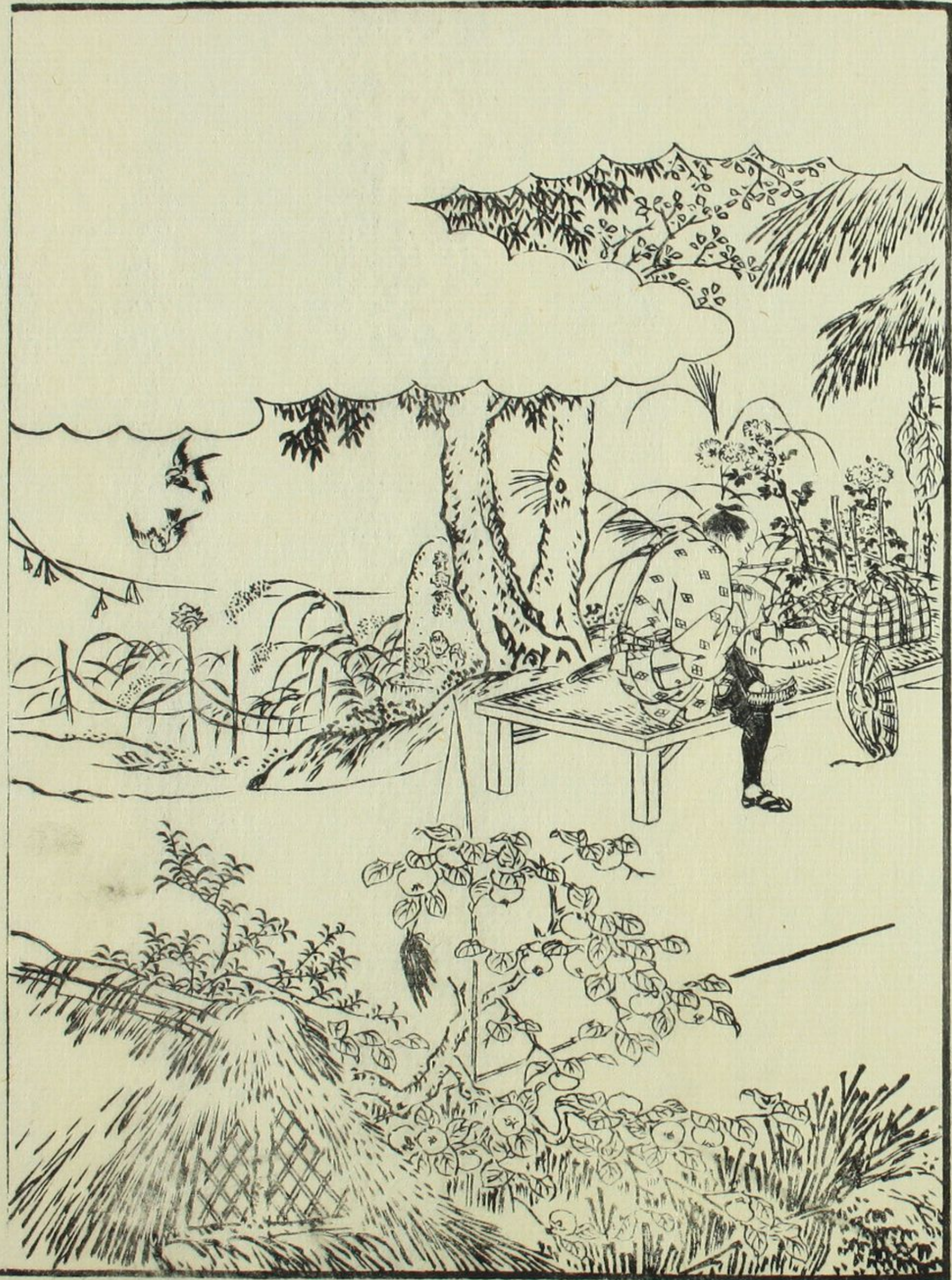
浅間洲 同所の河洲をさうとありしを足立姫瀧死の所ありといふ

十二天衆 足立姫の侍女の死骸を収めて十二天と稱し船方村の惣守あり

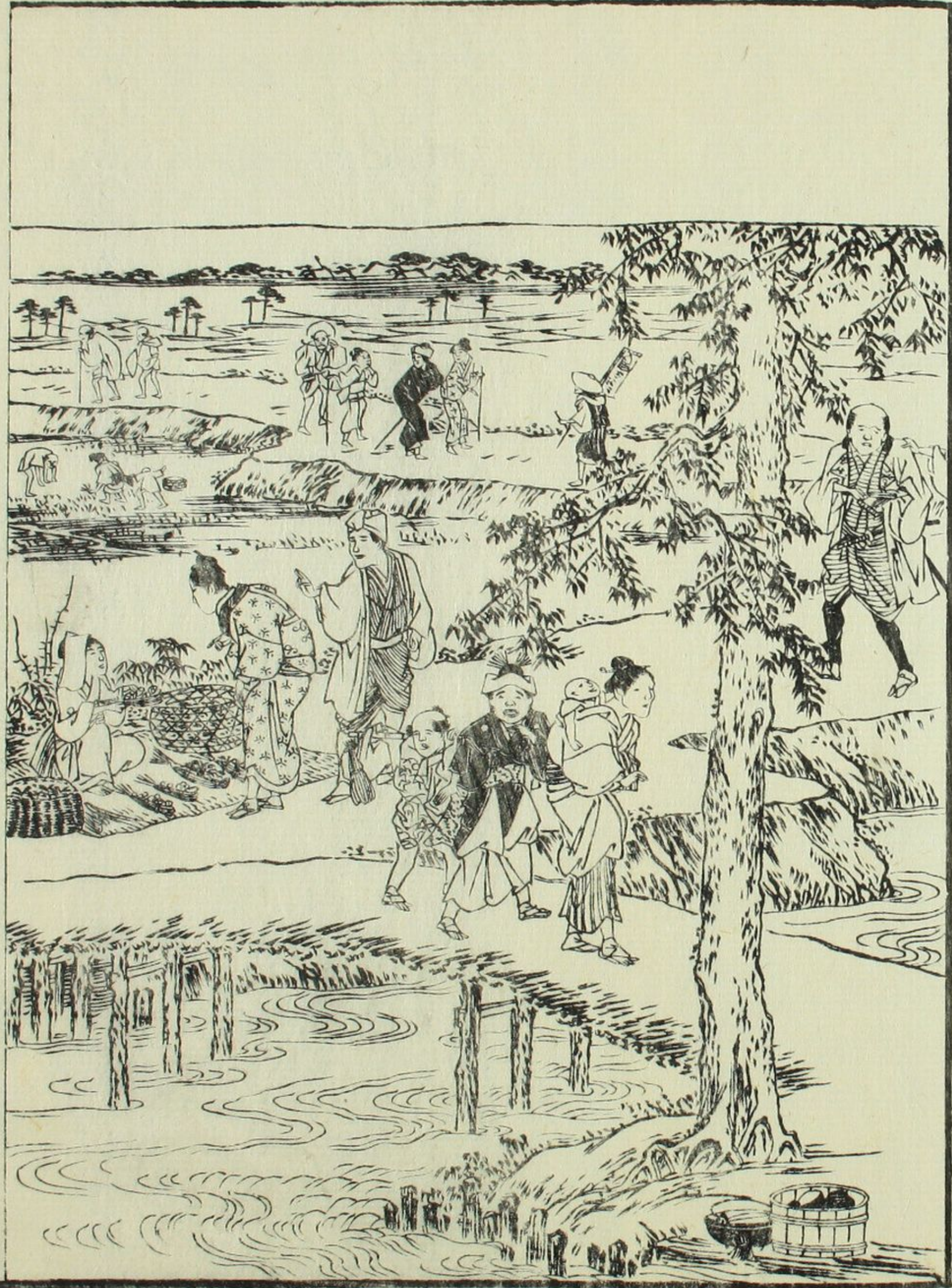
餘木阿弥陀如来 宮城村龍燈山性禪寺より安んじ往右行基大士六辨の阿

弥陀如来の像を彫刻ありしり餘材を以て是より造るにまは草堂の

中より安置ありしを遠く後明應の頃正譽龍吞和尚改て一字の梵刹とす



光茶銚  
 千住の驛とあれ  
 道の左側とあり  
 土人の昔老茶  
 屋とも呼あつり  
 むろ 母店茶  
 銚の光澤の殊  
 又勝たり成  
 重れ清感賞  
 あつりし下り  
 茶銚竟  
 名物とあり  
 其名さへ  
 世よ  
 光る  
 との  
 さのぬ



春秋二度の彼岸  
 六阿彌陀廻と  
 日あけの麗あるよ  
 催され都下の貴様  
 老る若き打群は  
 朝と宅居をあと  
 夕も行程まらぬ  
 逢くたる春の月も  
 長あらし秋の  
 暮ゆき



此此に住しぬる則此寺の元祖なる當寺は足立姫の墳墓と稱するの  
あれとも詳ありと

五智山總持寺 西新井村ありて真言宗より遍照院と号す弘法大師の

草創より奉旨弘法大師の靈像由同作るを靈驗著く毎月廿一日あり

開帳ありて奉詣頗多し 或人云尚寺弘法大師の靈像をのりて北德真間山弘法寺に安置

阿伽井 奉堂の左の傍あり則弘法大師の加持水あり洗目服薬に用る

八幡宮 六月村ありて別當を空天寺と号す傳云八幡左郎義家朝臣

奥羽征伐の時此國の野武士とも道を遮る其時六月空天よりバ味方の

勢勇く戦むとる氣色ありしより義家朝臣公中鎌倉八幡宮を

祈念ありし不思議大陽燒く如く先王を背し交りぬ敵の野氏士本日

小川の故に眼くらと大に敗北し依り此此に八幡宮を勧請ありしと此

故に村を六月といひ寺は空天と稱し又幡正山と號すとあり

白旗塚 伊奥村田の中あり傳云往古八幡左郎義家朝臣奥羽征伐の時

此地に白旗を建凱牙を留へしと此ありしと近頃返此塚上は小祠あり

其傍に寄りのあり崇あり故社荒廢をふひたれとも其傍に再建も

せしと今塚ありを存す 今此塚の上は此辺の田面を白旗耕比と

り又惣塚と稱するの五箇所あり 兜首實檢あり後其

萬徳山明王院 梅林寺と号す梅田村あり新義の真言宗より奉尊に

比翁菩薩を安と寺記云當院其基志右三郎先生義廣ハ八幡左郎義家

の孫六條判官為義の三男あり 始常陸國伊予に住し後因幡志左村あり

榎戸一院を創基し新願所とす 當院見り昔は是より先治承の頃頼朝初

義兵を起すの時義廣自立の志あり故に頼朝に隨つと初小山小四郎朝

政が為に敗らる其後同左馬次義純の孫あり 蟄居し此梅田村に住す

外右の方と号す其後其子義隆の孫あり 其裔常陸久廣 當院の傍に始りて天満宮

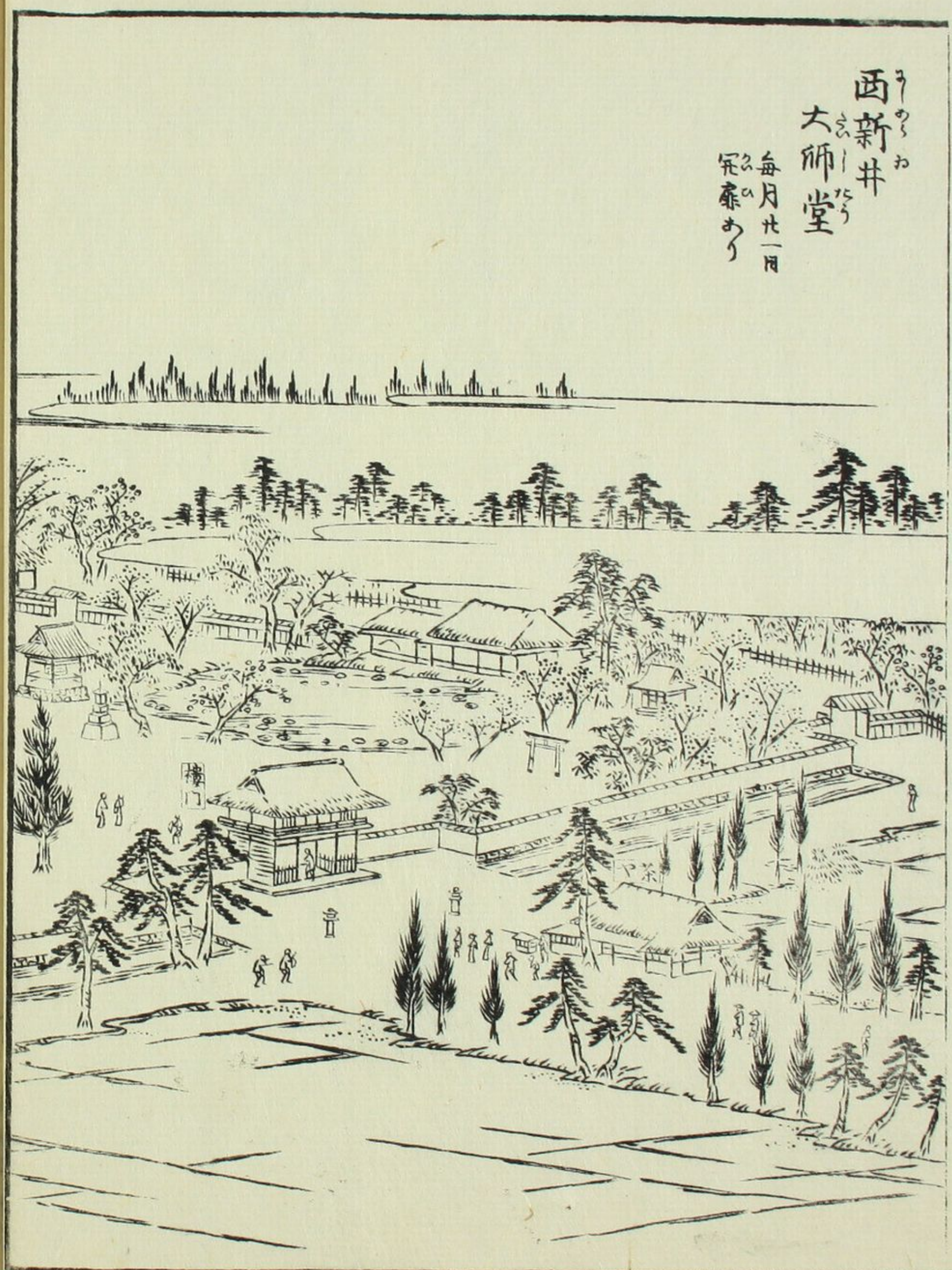
を勧請し鎮守とす又神告に仍姓を梅田と改め小左郎と号すと又遠く後

永正年間東大に亂る同左郎左衛門久義 小左郎久廣より十六代の孫同帶刀

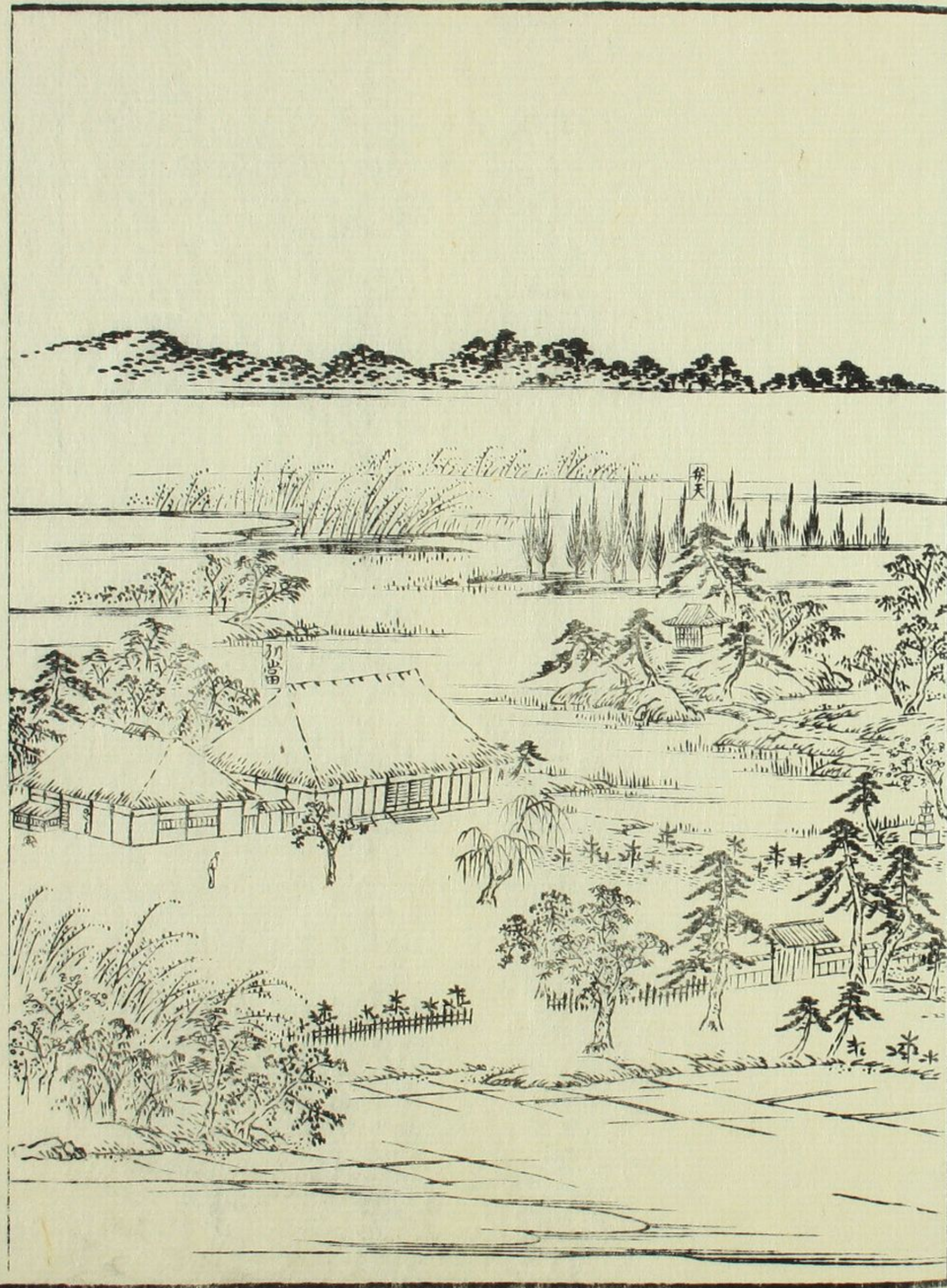
久光の孫あり後左馬次と号すと 是を



西新井 うししんい  
 大師堂 おおい  
 毎月廿二日 毎月廿二日  
 祀奉あり 祀奉あり







梅田天神祠  
不動堂  
別當明王院



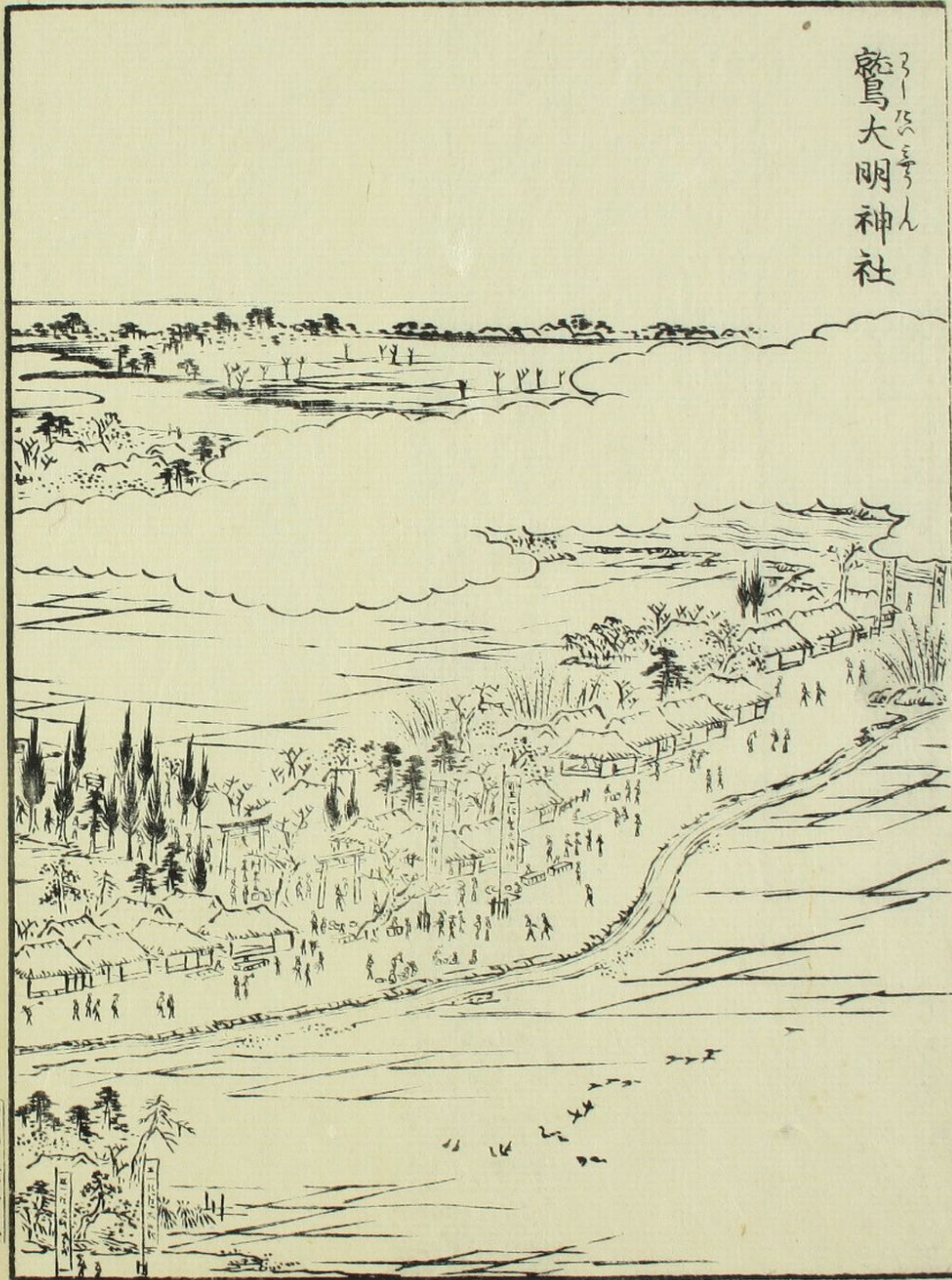
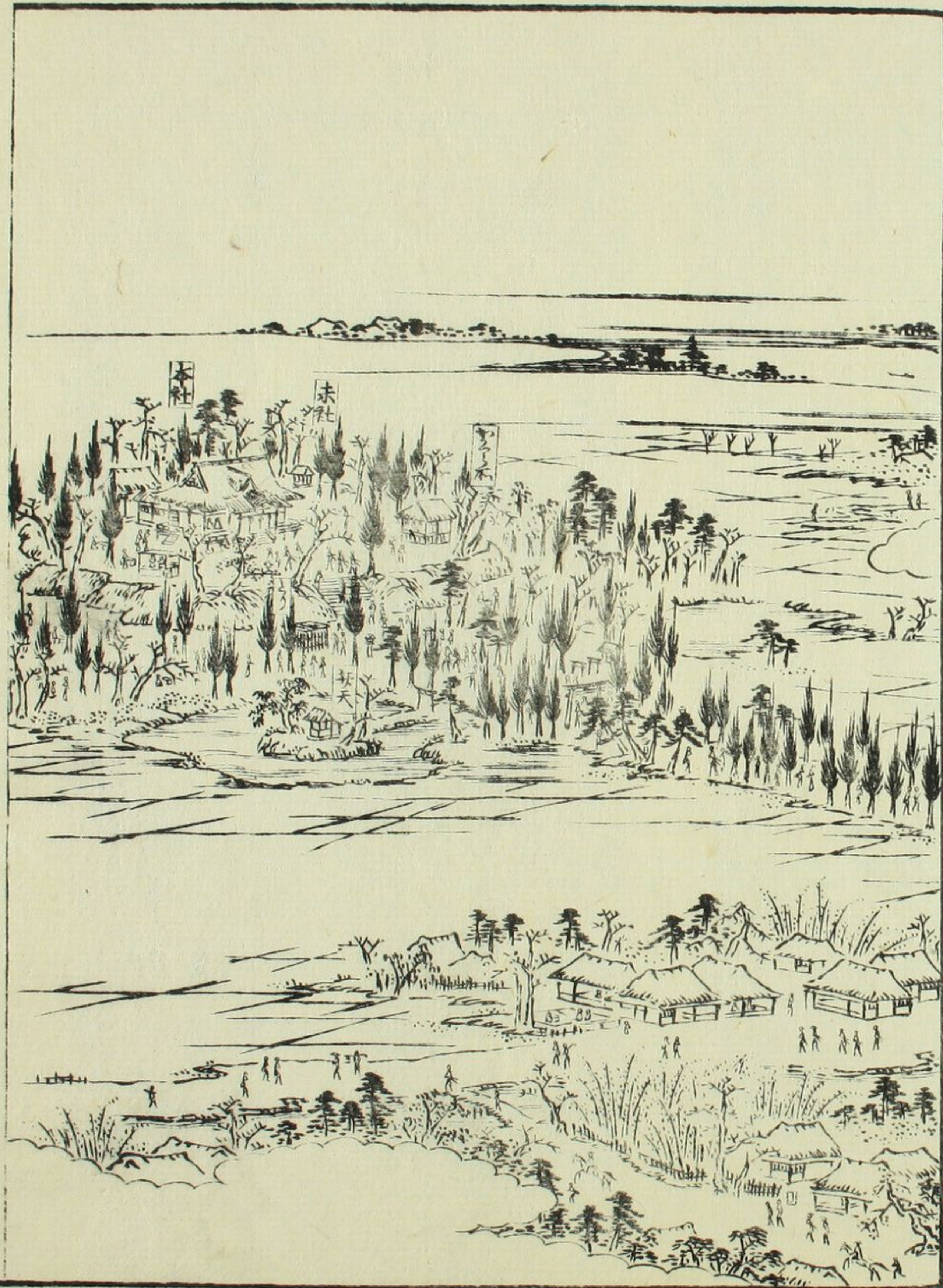
厭ハ丹別嶋材城ヲ移テ住リ又同國峯山城ヲ移ルトシテ由テ遂ニ敵  
爲シ生害ト長子久頼ヲシテ久友 其後國民當院ニ亂入シ遂ニ破壞シテ  
一を慶長の頃頼專坊 舎才 今此地ニ迂リテ寺院を再興シ真知法印を  
以テ中興瓦山トシテ又寛永二十年の春 大樹 御教鷹鳥のミナリ立

不動堂 本堂右の方より本堂不動明王弘法大師の作りて覺鑊上人根末傳法草創の頃  
天満宮祠 不動堂の後の方小き丘の上の古松の  
正一位鷲大明神社 花亦村のあり此地の産土神トシテ祭神詳るト本此を釋

迦如末よりて鷲ニ乘テ歸相より別當ハ真言宗トシテ正覺院ト号セ  
每第十一月兩月以テ祭日トセリ縁起曰本比叙迦牟尼如末ハ新羅三郎  
義光宗毅の靈儀トシテ天喜の昔眞別安倍貞任叛送を企るの時奉るの  
示現よりて其軍勝利あり由を記スモ其説詳るト

石濱 今橋湯といハ義経記ニ治承四年九月十一日  
右大將頼朝御下總國より武藏國へ打紙ありトある条ハ石濱ト申  
其後千葉家の所領トシテ代々豊を知行トシテ

石濱城址 其地今ささりト申事跡合考ニ神明宮の北の方ありトあり  
神明宮の北の方ありトあり  
鎌倉大草紙云

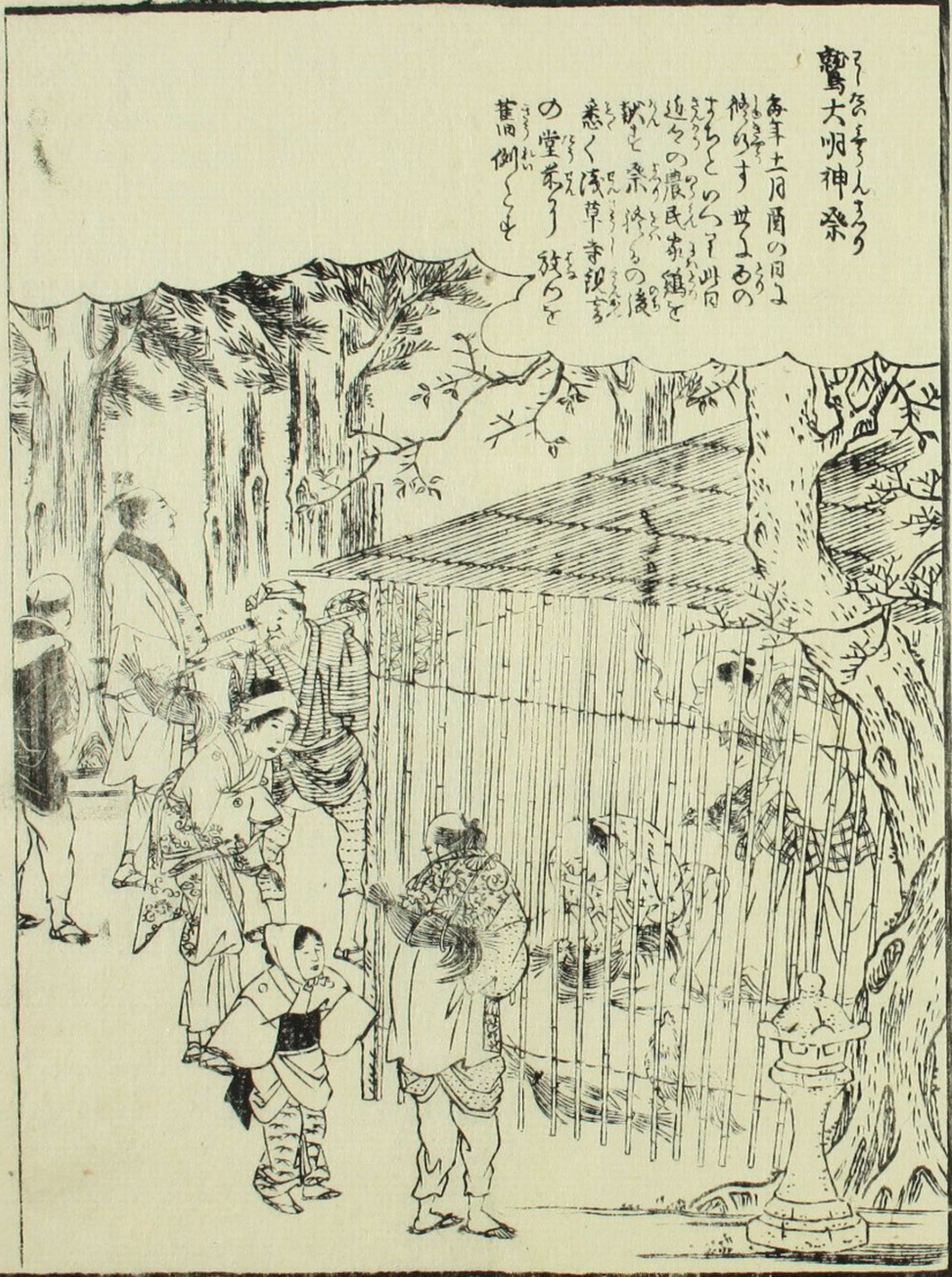


鷺大明神社

千葉公胤直上校憲忠と謀りて又子兄弟共々一味して成氏を背く  
 成氏の敗戦  
 故千葉大助満二男陸奥守入道常輝又子其子下總國馬加の体  
 より打て出成氏の味方となりて合戦を竟りて亨徳四年三月廿日胤直敗北  
 其子胤直を以て千葉入道常瑞合身中勢入道了心等悉く切腹と有りて  
 陸奥守の千葉へ移り千葉の跡を継ぎ然るに上校より中勢入道了心の子息  
 實胤自胤二人を取立下總國市川の跡を捕籠らるを以て千葉家二流とれり  
 總列大上其頃京都を東下野守常縁陸奥守退治とて馬加の跡を  
 向ひ攻戦ふ陸奥守のいすくと千葉へ引退く  
 常縁の千葉公常胤の六男東六郎を夫  
 康正二年の正月成氏市川の跡を圍む同十九日落城し  
 實胤の武列石濱へ落行自胤へ同赤塚へ移る其後上校家より胤直の一  
 跡より實胤を千葉に任じむされと成氏陸奥守の子孝胤を長負の  
 子とて千葉に居置且多る間  
 孝胤の其父陸奥守入道常輝と共々故胤直兄弟を亡し  
 成氏奉公の人手に成氏より千葉の跡を賜り  
 實胤を  
 城へ入る少少れいと武列石濱舊西辺を知行一時を待て居たり世の

鷲大明神祭  
 毎年土月間の日よ

修りす世よの  
 近々の農民が種を  
 秋と祭終りの後  
 悉く浅草寺観音  
 の堂へ参り  
 舊例とす



中を述懐し濃列に宗居を依り上叔家より實流の跡を兄の自衛小賜り文葉女  
に任じ是を武列の千葉と号す 以上藤倉大草紙の

南朝紀傳云 丙子康正二年二月千葉乃家も成氏と上叔と相論よりつら  
二よりこれ惟流と園城寺の某武列と趣く云

梅 花無盡藏 文明丙午隅田河詩註云 隅田在武藏

下 總 西國之間路傍小塚有柳道灌公為攻下總之

千 葉 構長橋三條云云 八景或雪讀獻千葉蓋上總

同 書 便面題詩註云 下 總 西國之間路傍小塚有柳道灌公為攻下總之

雪 月 碧湖煙雨後 漁歌鐘色送飛鴻

片 帆 千里賣花市 上下 總 飯君握中

又東古戦録小田原實記等の書より千葉大助満尚の成り北總馬加の城主陸奥守康胤異母弟惟流  
と泰誓をあらうるに康胤打勝て總領を執るは依り宿老の回轉未だ馬加の弟惟流をいさるひに

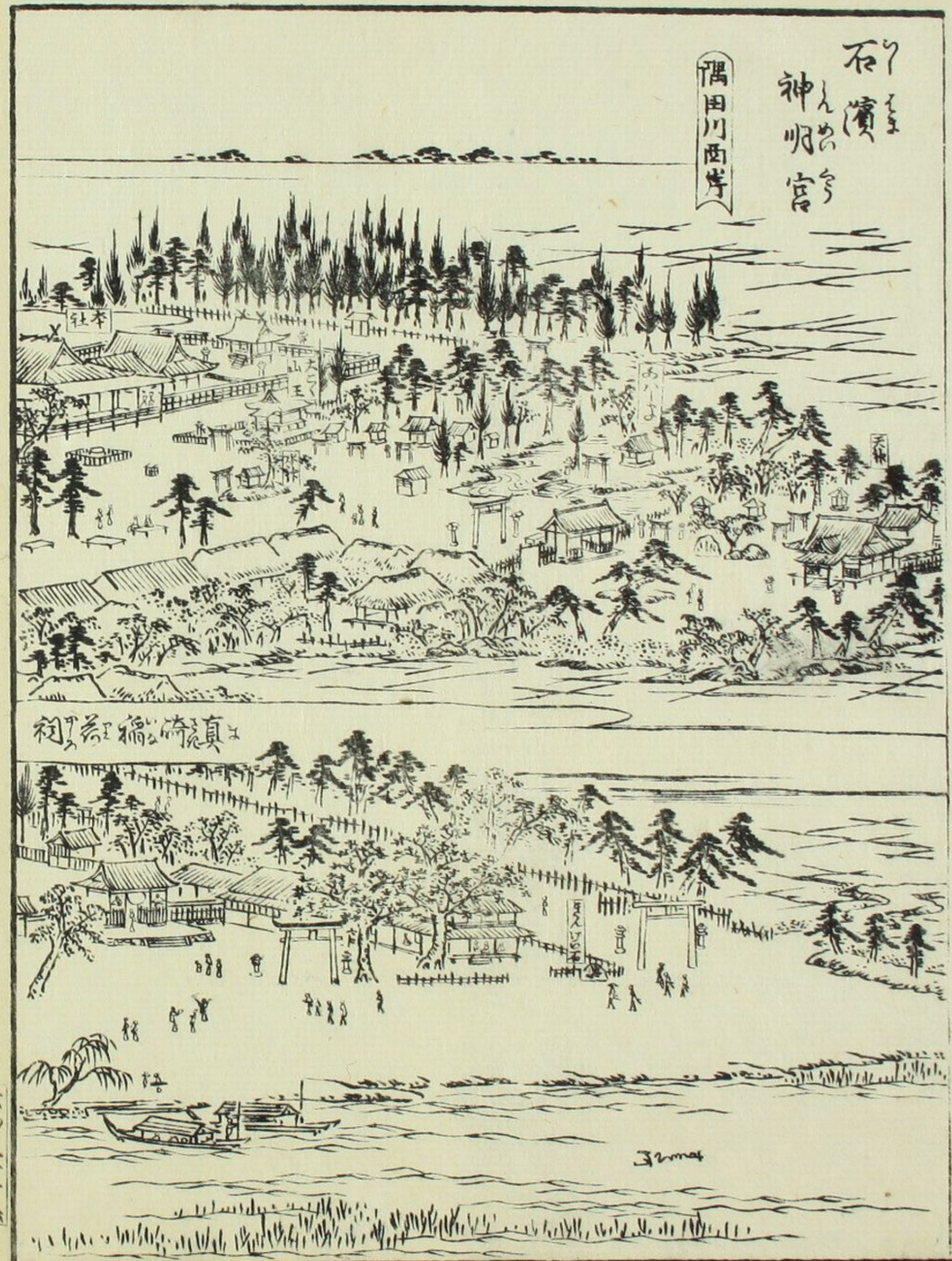
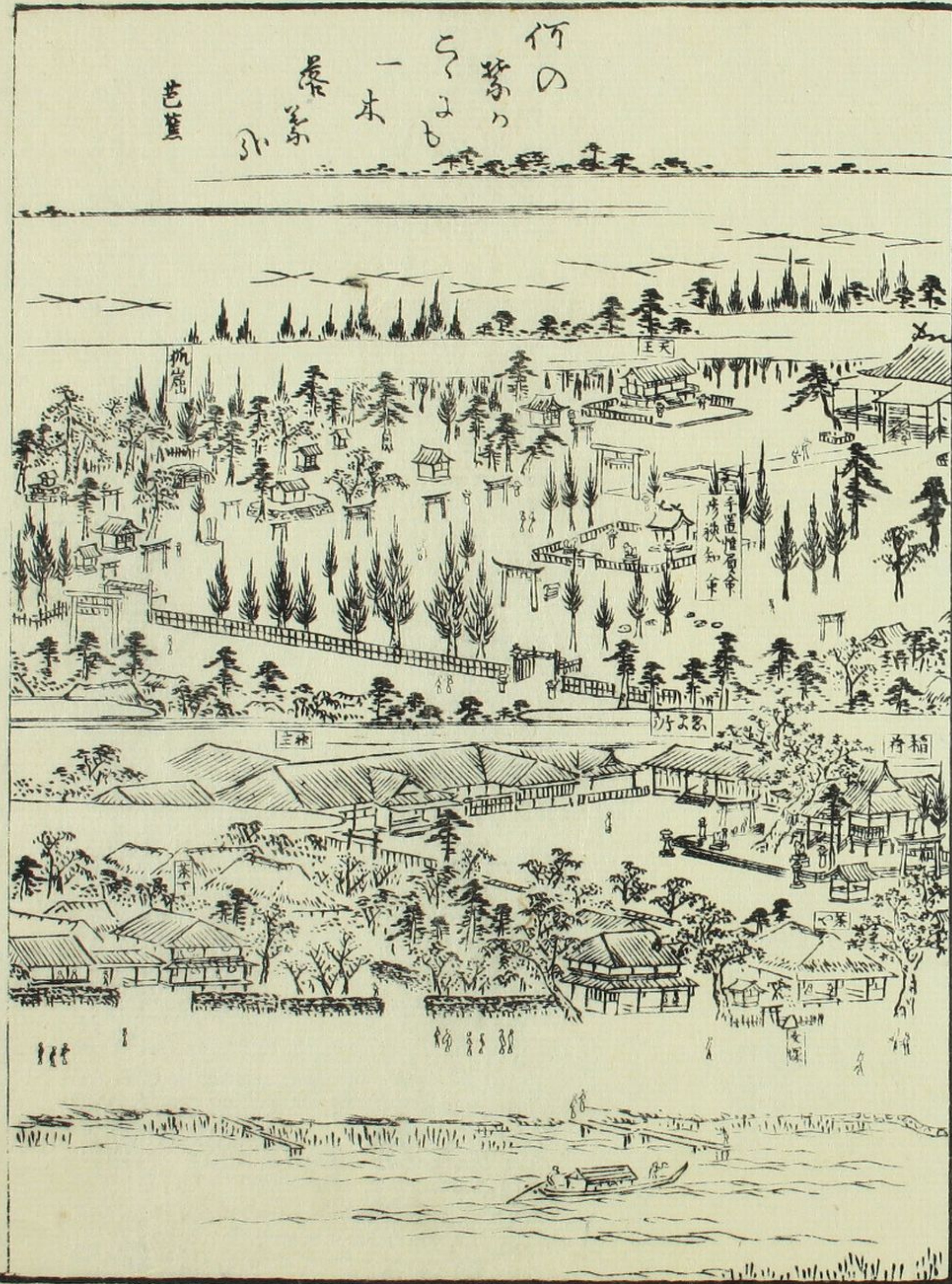
よりのち田道能成法を授けり高家とて微力をあらはれり石濱の寄をたつて是を守  
らし其後惟流自身も其子の郎御利をうりて上叔朝臣に任じたり

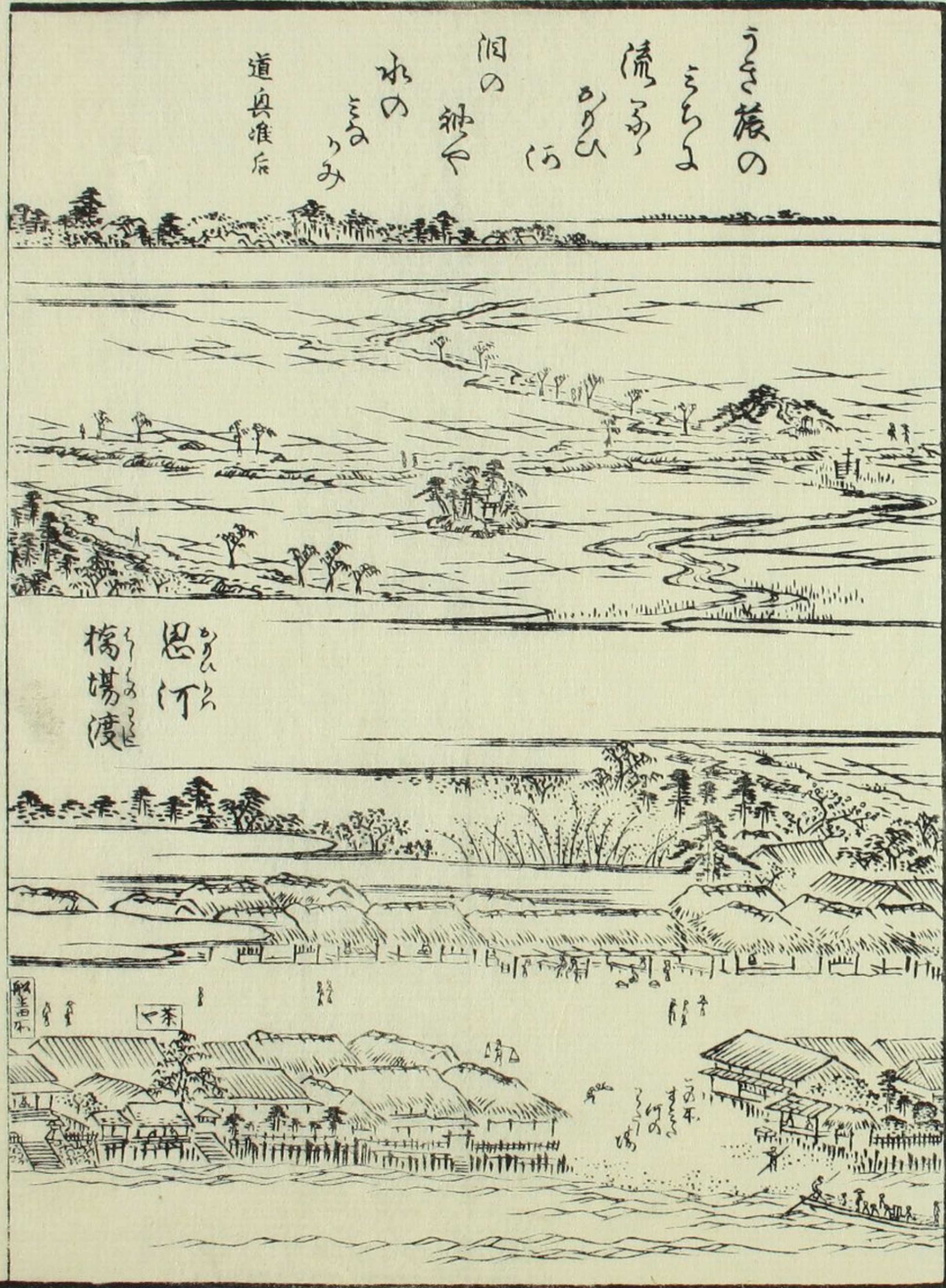
後北条氏康の旗は属一石濱近辺の所領を女捕し跡を胤宗と譲りたりされり天正元年  
癸酉十月右門の御所義氏下總室右の碑を改る頂胤宗討死を依り其後石濱の千葉あり女子のまを

男子ありより氏改の下知りて北条常陸公氏繁の三男を継りて依り其後石濱の千葉あり女子のまを  
て子繁の遺徳相續ありしむらりといふ幼少ありてその本内上府と出る者預り上府討死の後其子  
宮内少輔支配ありて其頃石濱領四千貫ありしむらりといふ

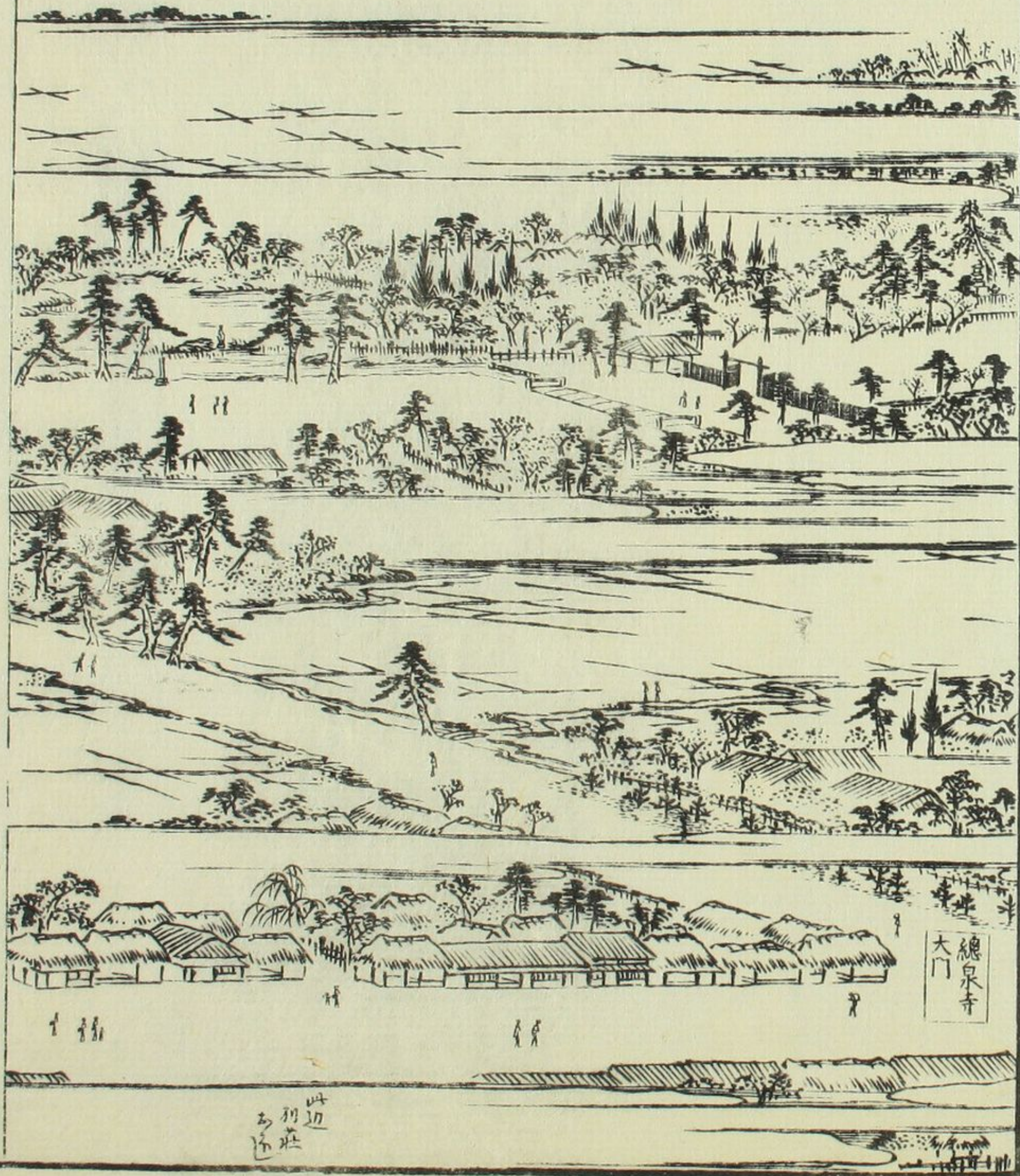
橋場 今神明宮の辺より南の方今戸を限り橋場と稱し舊名は石濱  
義經記は治承四年庚子九月十一日 頼朝を井隅田の西に  
頼朝公隅田河を越て中總國より武藏國へ移りて  
時二三日の雨は洪水岸を浸し軍勢成渡し兼たりあるに武衛江戸を郎  
重長に仰り浮橋を保しめむと重長あて諾つと依り子繁の常  
兵衛 重 兩人江戸左郎を助むと知行所今井栗川おめりうりまきり  
栗川おめりうり 海人の釣糸を投多登日江戸左郎が知行所を  
石濱の折節西國船の着たりと投千艘集り二日の中は浮橋を起り

東鑑は同年十月二日 頼朝を井隅田の西に  
頼朝公隅田河を越て中總國より武藏國へ移りて  
時二三日の雨は洪水岸を浸し軍勢成渡し兼たりあるに武衛江戸を郎  
重長に仰り浮橋を保しめむと重長あて諾つと依り子繁の常  
兵衛 重 兩人江戸左郎を助むと知行所今井栗川おめりうりまきり  
栗川おめりうり 海人の釣糸を投多登日江戸左郎が知行所を  
石濱の折節西國船の着たりと投千艘集り二日の中は浮橋を起り





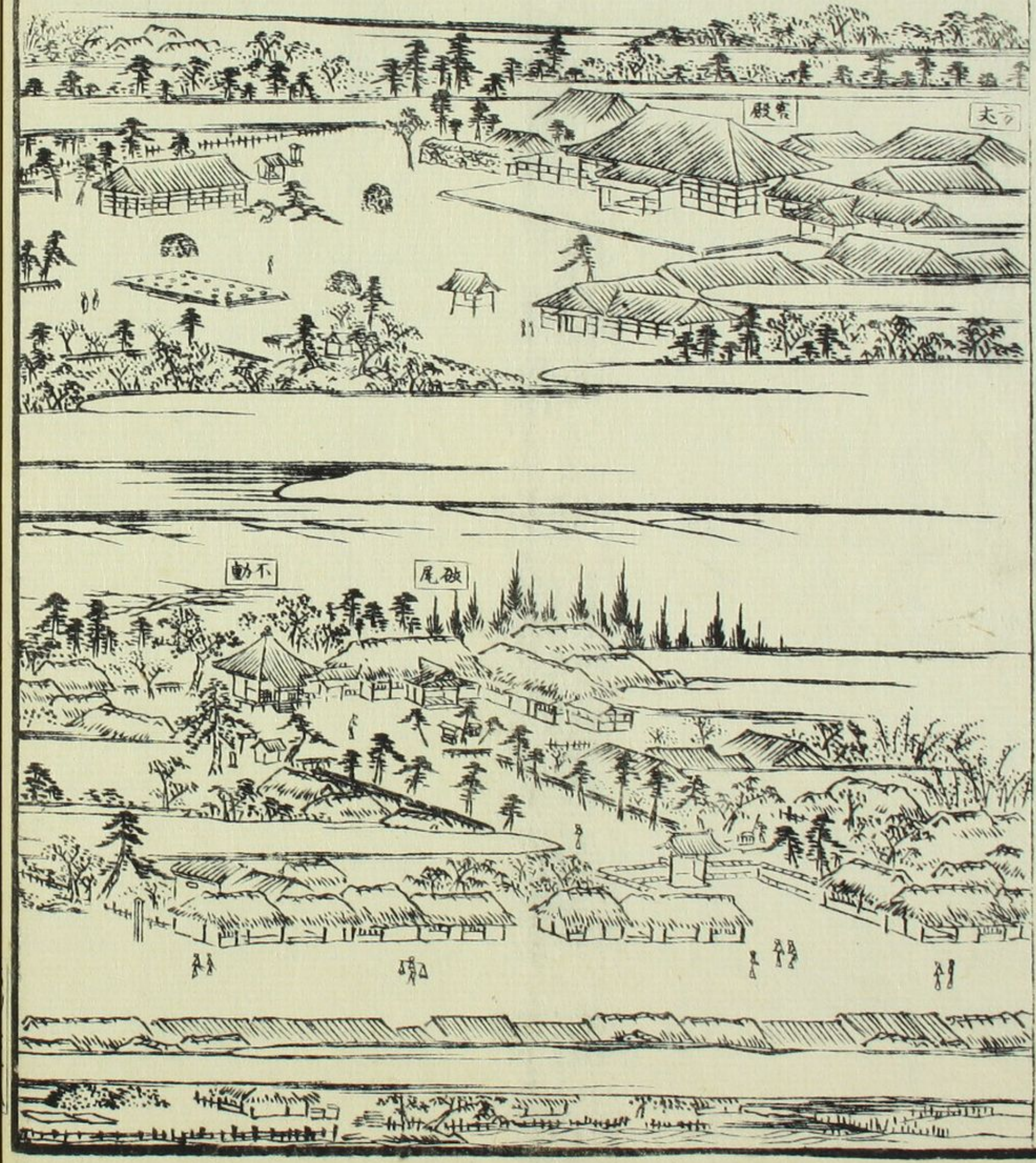
其二



總泉寺  
大門

此  
所  
也

總泉寺  
不動  
尾不動  
藥師



不動

尾不動

殿

大



海芽の  
 原の  
 わし  
 焼  
 の  
 其角



海芽の神社  
 海芽の原  
 玉娘稲荷

其四



人々  
 ありて  
 海芽の  
 霜を  
 道真准后

此田  
 列莊  
 海

法源寺  
鏡ヶ池

其五



佐殿神妙あり仰られ本井隅田を打越て板橋より着ぬかとのあり  
隅田河右

海村ありしゆの義経記の  
夫木抄

隅田河むかしよりと今とての身を浮橋のある世ありと云れ  
光俊  
新記系書いしゆの義経記の  
夫木抄

梅 花 無 蓋 藏 詩 註 云 隅 田 在 武 藏 下 總 千 葉 構 長 橋 三 条 云  
傍 小 塚 有 柳 道 灌 公 為 攻 下 總 千 葉 構 長 橋 三 条 云

朝日神明宮

傍陽よりわき石濱神ゆとも  
或人の説く此此は本宮あり  
或信小橋湯

神ゆとも号く祭神伊勢より同く内外両皇古神宮成斎まらる社傳云

人皇四十五代聖武天皇の御宇神龜元年甲子九月十一日鎮坐と云

牛頭天王社  
本社の左の方より傍陽の地守と祭礼の毎六月十五日あり世に及入の押合  
祭として神樂今戸橋をわきとて民子の輩とてく神樂早より其神樂

能田河渡

名子

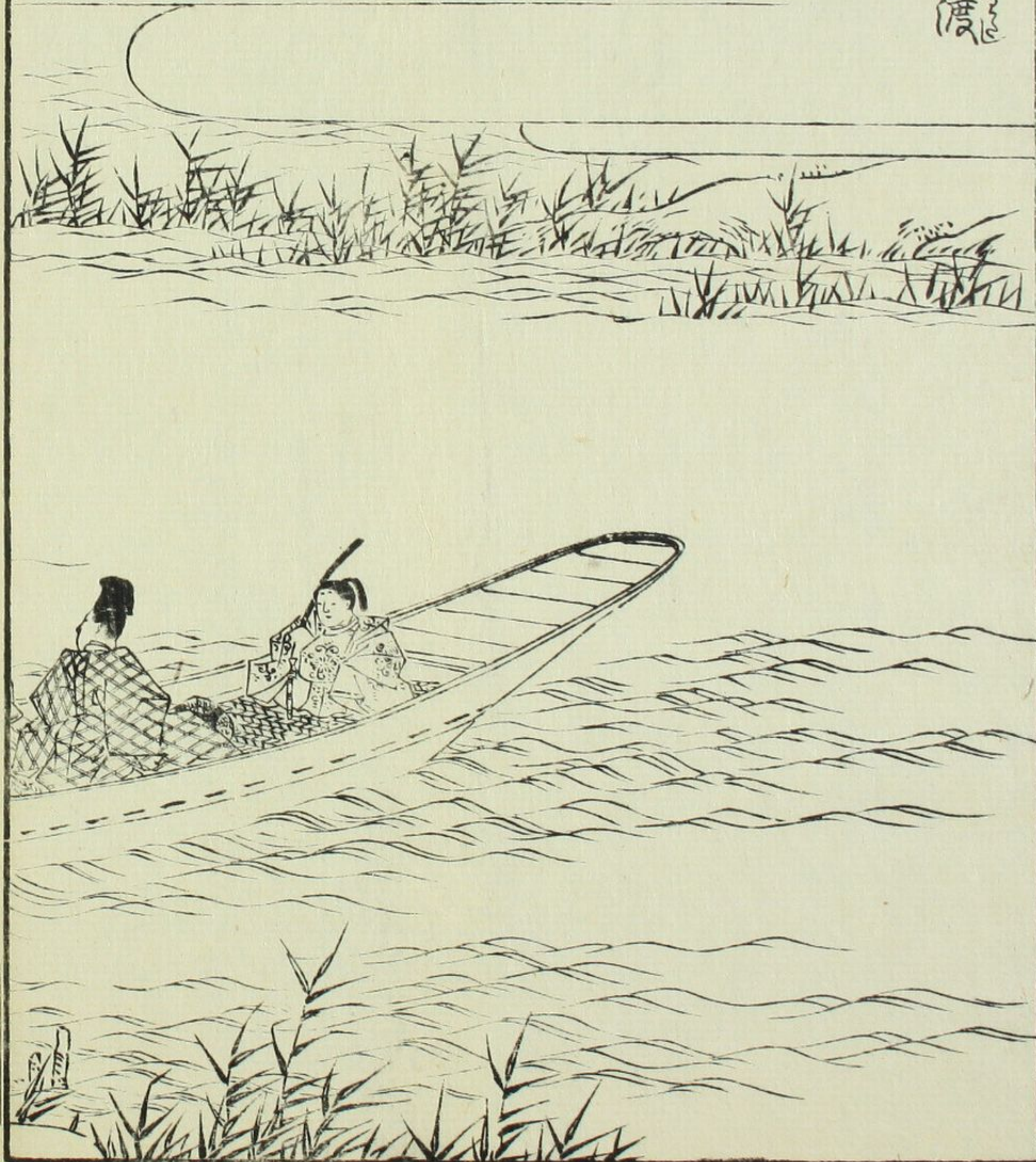
あけ

さ

う

ん

都鳥



家

あ

い

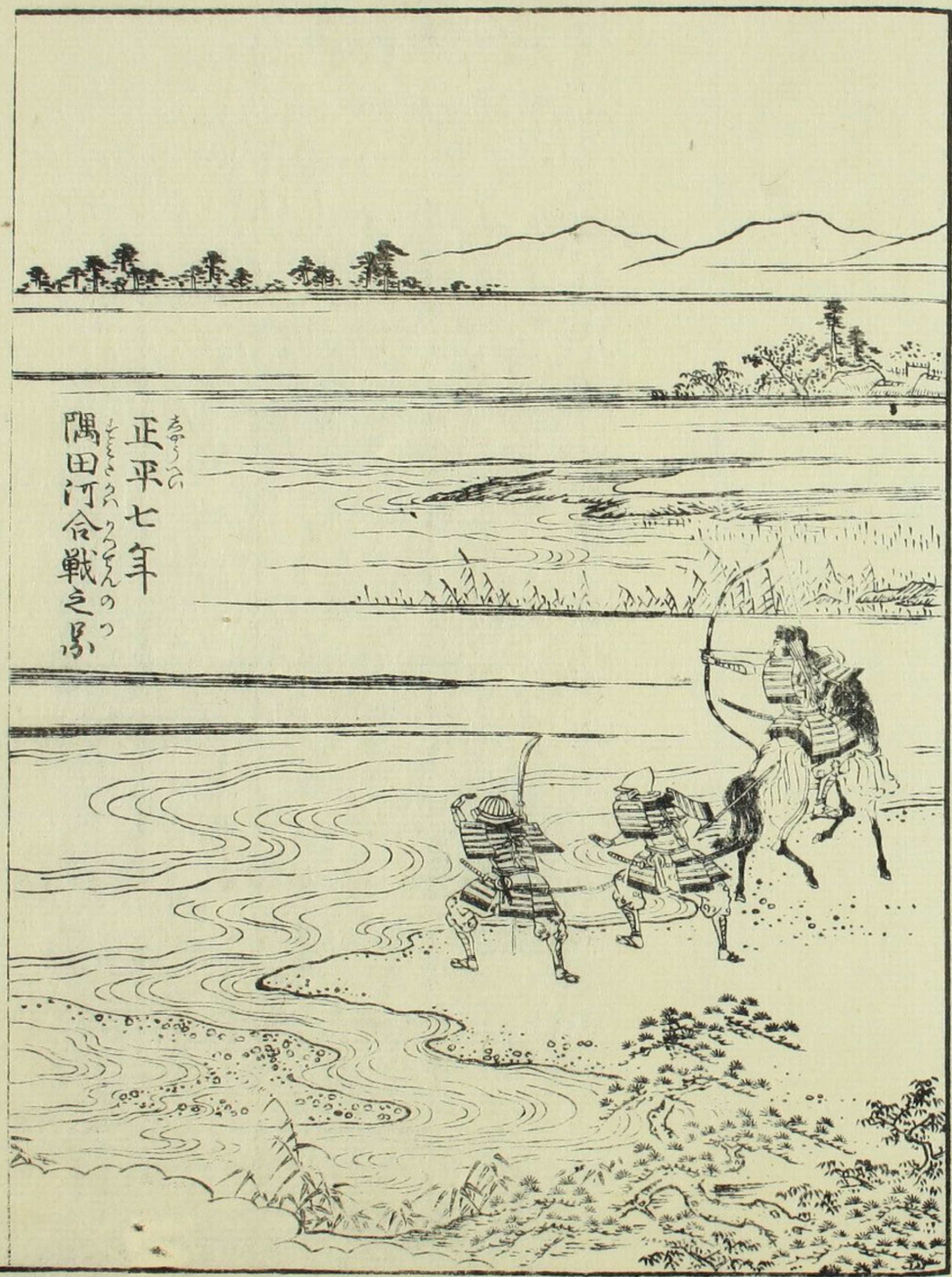
あ

う

と

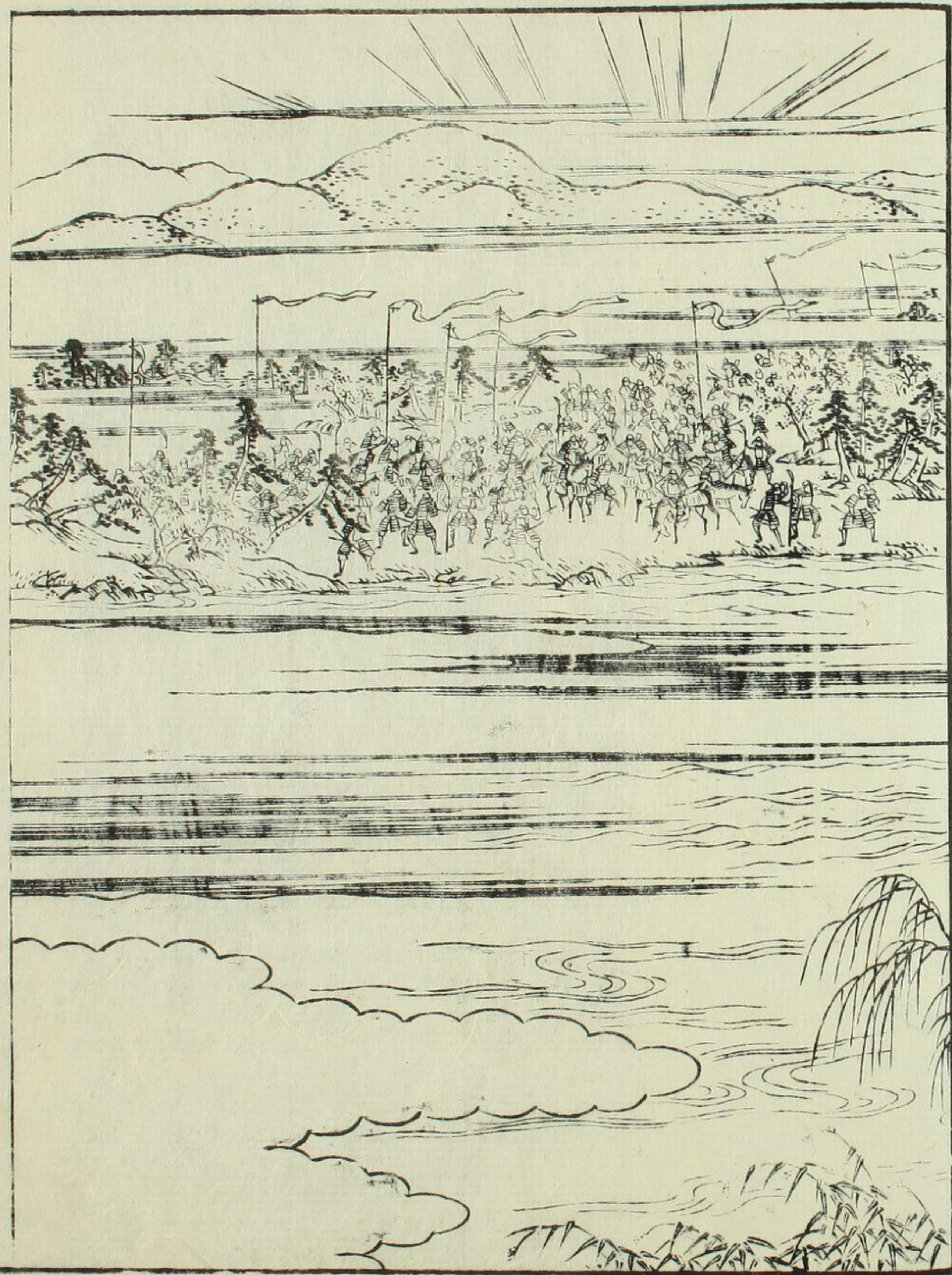
在原業平



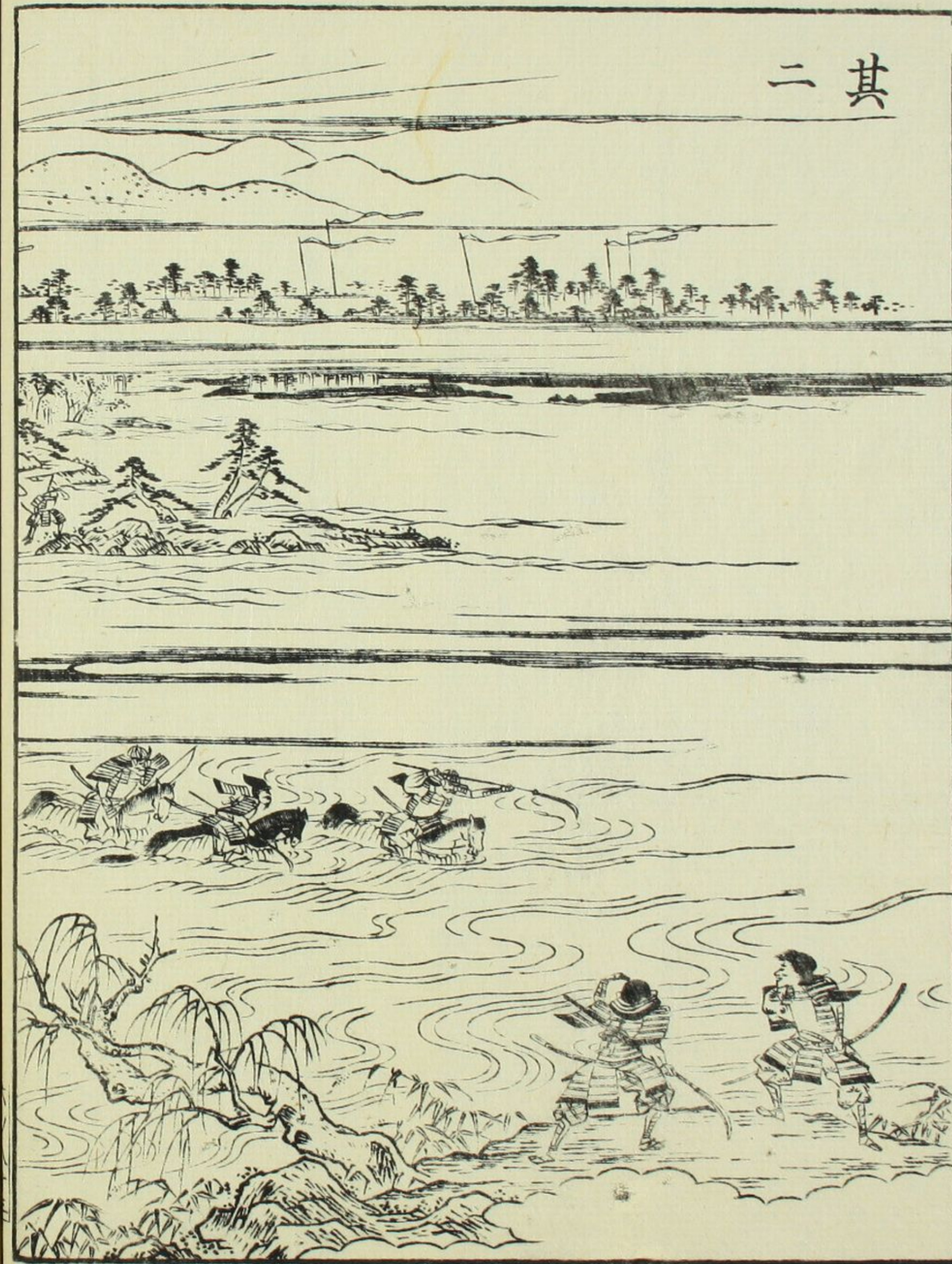


あつひの  
正平七年  
隅田河合戦之景





其二



此を流るるれく... 神宮の右の方より... 天満宮... 當社の建久正治の頃...

小森宮... 宇都宮等の山尊信... 神田等を寄附... 此の頃...

上久乃... 毎葉六月晦日名紙... 稜を旅行と祭禮... 九月十六日...

真光稲荷明神社... 同所隅田川の流... 臨む祭神倉稲魂...

久代千葉... 兼胤字... 靈珠を傳ふ... 此靈珠の加護...

先登の基... 同守流の代... 此石濱の味主... 境内の諸寺...

として彼靈珠... 稲荷を勸請... 真光稲荷明神と号...

神本樓... 本社の前... 稲を擧げ... 中間の虚より...

此社前の名... 隅田川の流... 溶くとして... 晝夜を捨て...

之河面小臨... 四時の風光... 貯る殊更... 其の日の...

酒に秋の夜... 中流に掉... して月を掬... とき其の夕...

且體なる... 白鬚本母寺... 雪の朝... 影を共...

思川... 稲荷の... 橋場の渡... 坊行道を...

四年唐子... 藤倉將軍... 賴朝... 此地を過...

駒洗川... 号する... 中里民云傳... 按東鑑...

其の川より思ひ川後乃社やそのまみ

道與准后

隅田河渡

橋場より須田堤のりく右に渡るを今の橋場の渡と

唱へ 今集 昔の橋場の江戸鹿子と出る草紙より今の渡り今のとらうを川上ありと不のありき

古今集 昔の橋場の江戸鹿子と出る草紙より今の渡り今のとらうを川上ありと不のありき

音妻の道の記

角田河らりと見えよゆく今船

これらありまらまら思ひらすまら河原の渡りりけふ 長書

とてたそれとまらまら思ひらすまら河原の渡りりけふ 同

如く道の道ありての観音とて國をとりてめとる

夫本抄

夕霧小須田のりく見え後くも舟人よまらまら

経兼

石濱古戰場

橋場の比とて石濱といへるに似たり

新安手簡より石濱生石濱の

左平記云正平七年壬辰閏二月

故新田義貞の次男左兵

衛佐義貞之男少将義宗後父兄才在衛之義治義兵を紀一其勢十萬

余騎よて武藏國へ打城たり

これより依る將軍尊氏も鎌倉を進發し

敵を道より待て戦を決せむと

同十六日僅に五百余騎よて武藏國へ發

向ありて追を小池集る勢をく

八萬余騎ありて同日武藏國へ

小手指原へ打て出新田足利の

兩勢二十萬騎入乱て大に戦ひ

の先陣急に敗れて引退たり

後陣をむら社りて大に敗走を義宗

自諸軍を牽て大に呼て云天中

の存の朝敵より家ありて父の

此戦ありて尊氏の首をんむ

竹の時をり期をくして只二

大旗の引よけり小手指原より

石濱迄坂東道既し四十六里を

小追分たり此時將軍の石濱を

打渡虎口を道る 猶將軍の兵





みろ着相實有の草を拂ひ言下の一喝より異學脱離の塵を拂ふと案  
の床の前より一千七百の則を重て以公傳公を侍へ坐禪の衾のりといふ朝三  
暮四の賜を得る文字言の語頭を離るる

浅茅原 總泉寺大門のありをり

田圃雜記 浅茅のありをり

人めさへゆれし淋しれタマシレ浅茅りころの霜をワリク 道真准后

妙龜塚

妙龜堂のありをり 青き一片の石にて長二尺あまり 碑面蓮花の上田圃の中は法阿と

古墳一基

云乎をらんとりあり 弘安十一年二月廿二日と彫りあり 山門の裏後養年を於て大谷深堂の墳墓を被りてん

とて其夜法蓮坊實の坊僧より上人の檀を寄出 蓮生坊 信生坊 法阿坊 東氏の法阿坊 隆隆の末  
道遍坊 徳茶坊 西伴坊 頭實坊 山門の裏後養年を於て大谷深堂の墳墓を被りてん  
年防田空り行ふりてんを記り 梅より法阿は第六序を夫流頼りてん 一掃横の常流のありてん 關  
赤六年 龍通のありてん 古墳をらんとり

鏡り沈

同所西南の方より傳へ云妙龜尼梅若丸の跡を去るに京より

さう満より未至り梅若丸身まうじを写し此沈より身を扱てむれ

あまぬとせ 傍小鏡沈庵と号する小菴あり

辨財天を女と見ゆ妙龜尼をまつるありと云

祭衣懸松

沈の傍より一松を存せしむるに妙龜尼の松の松をりてむれ

采女塚

採女は中より身を扱てむれ 夜明てのありてん 入らふありてん 入らふありてん

名をそれとせしむるは梅若丸のありをり

東野先生之墓

同所橋の通り福壽院と号する禪林あり 先生は江戸の諱は煥圖東野を字

古文を誦し若く復古の學を唱へ墓の傍に 南郭服夫は述る所あり 其文をよむ

歸命山法源寺

無量壽院と号し浄業の古刹にて總泉寺の南に隣る

宝龜元年庚戌の春智海法印始て此比に大日堂を建立を其後延曆

三年甲子の秋村里の人民力を合て一字の梵刹と号し砂尾石濱の道場

と号す

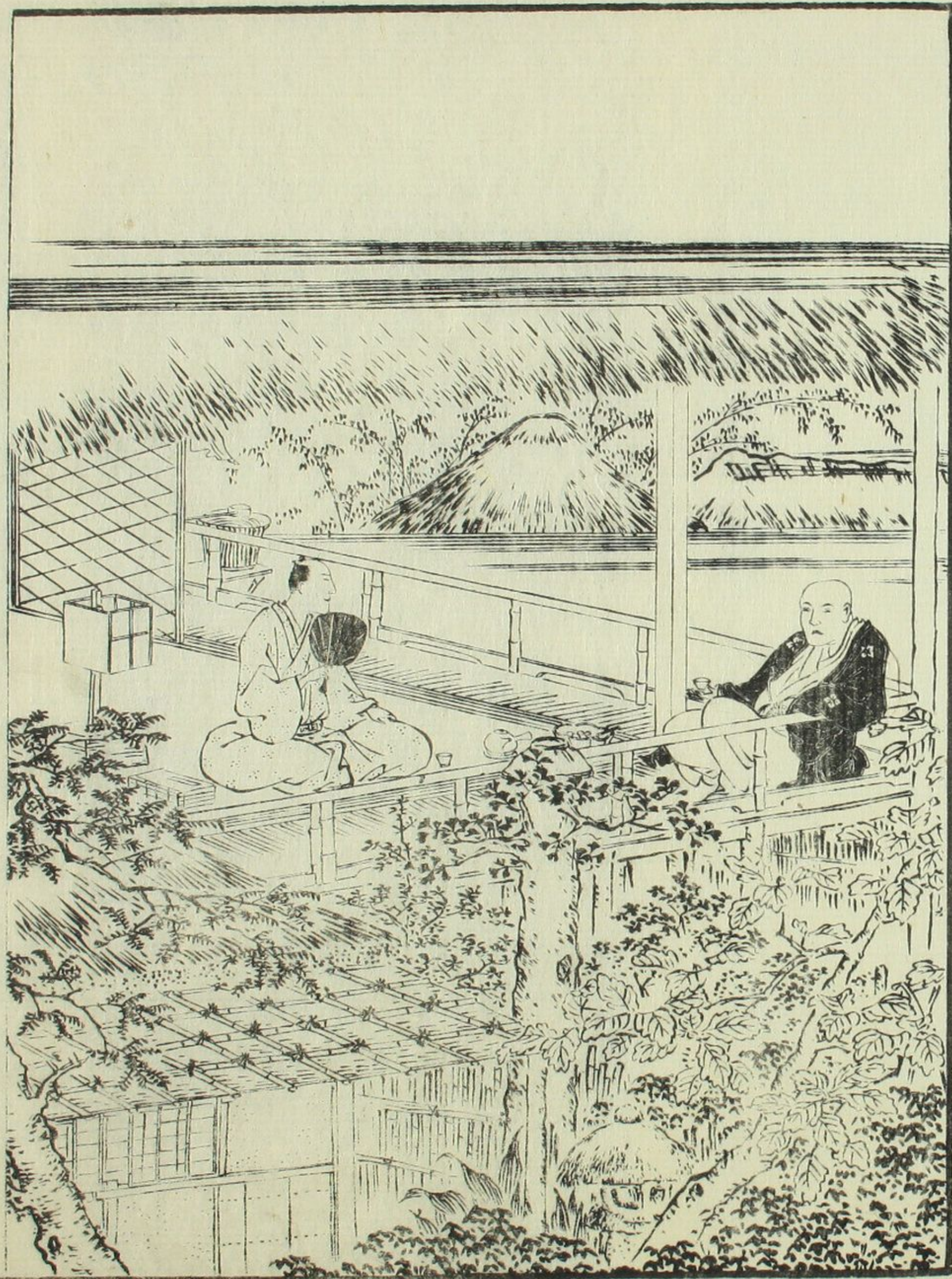
智海大僧智海法印のありてん 丙戌三月十四日代最二世権大僧於法印の天長七年庚戌四月

隆性院後二位藤原朝臣四辻有正卿墓

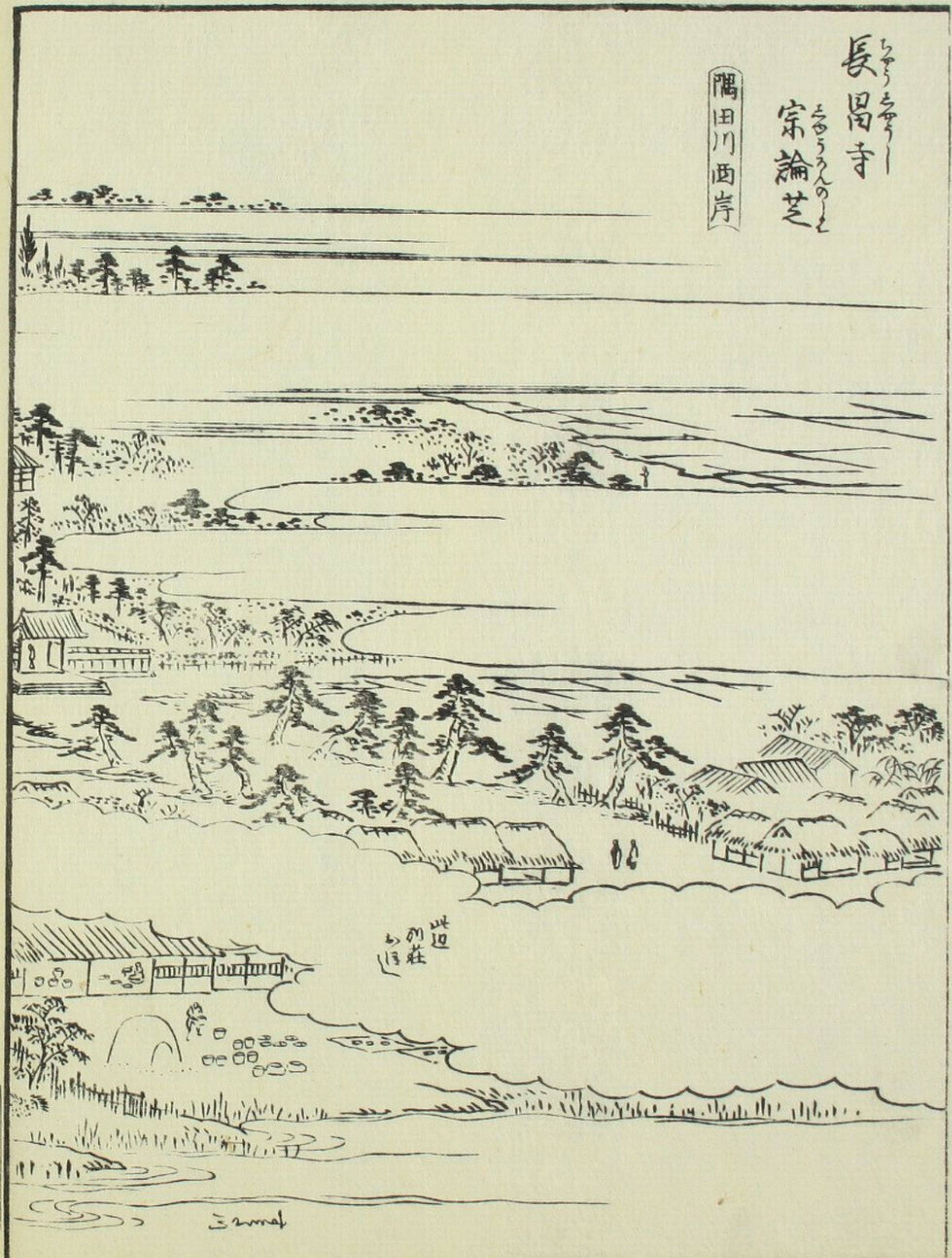
天六月廿七日とありてん 南有亭云く青石

其来由もあられり





くひる ちりて  
 水鶏ハ橋場の  
 わづらひ及ひ佃場  
 を佳境とせり  
 源氏物語も  
 あらくよは昔秋の  
 花紅紫のさり  
 あるよりわたく  
 そこらうとのうら  
 あしけるあいも  
 るまめありたよ  
 うきのうらたた  
 なるらんやこ  
 らしめられよ  
 梅のもとり  
 まつられ  
 さんし



長昌寺  
宗論芝

隅田川西岸

此道  
河在

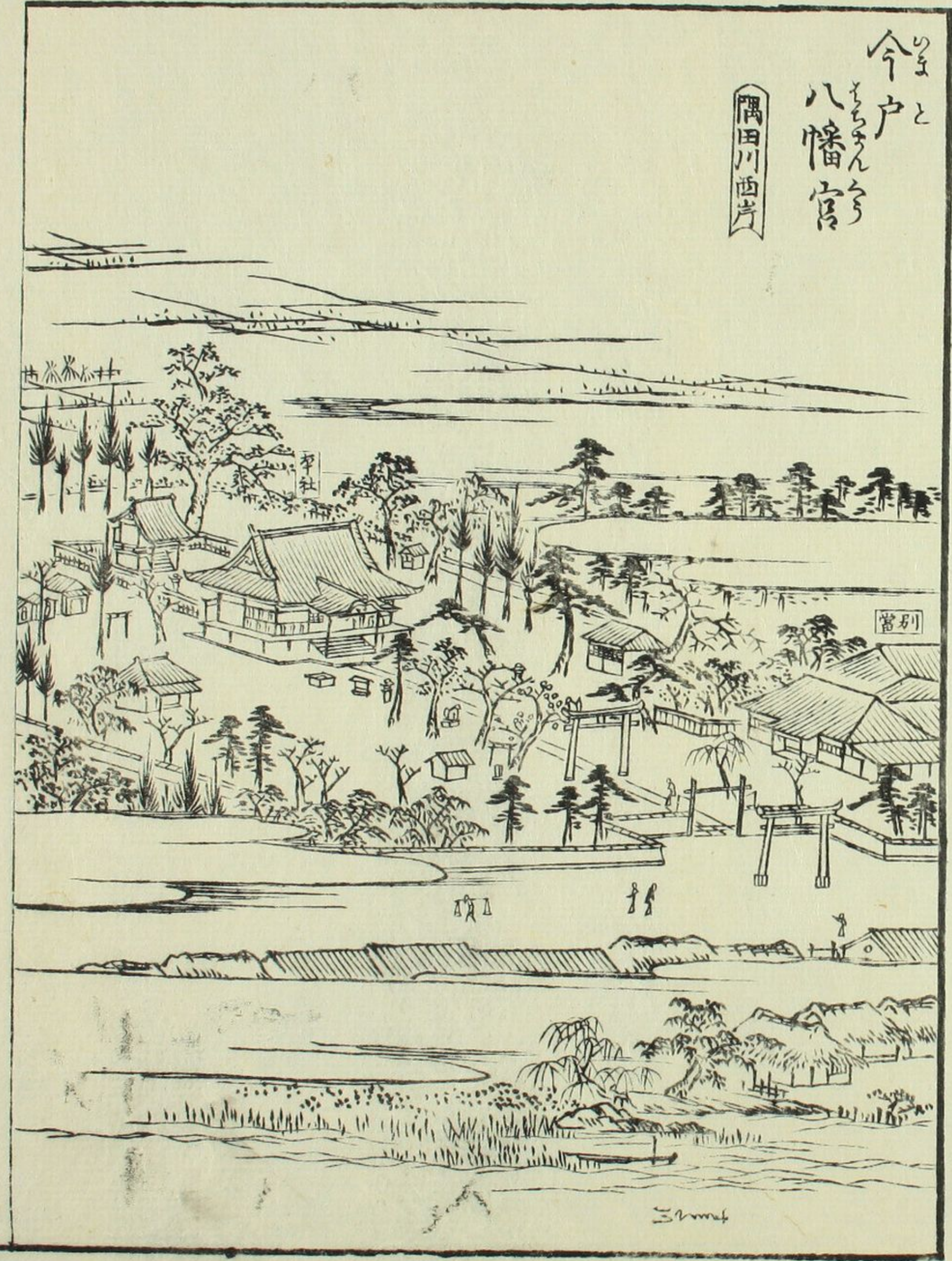
三

小戸一別當の天台宗の松林院と号す祭禮ハ毎年八月十五日  
放生會を後行す

社記曰源頼義朝臣義家公と共勅を奉りて奥列安倍貞任宗任を誅戮  
しゆの仍康平六年癸卯八月其祈願より鎌倉由比郷をより此今戸の  
地に至り石清水八幡宮を勧請あり  
今戸社記今律より作小田原北条家の分限帳より  
本内宮内少補牙領石清水八幡宮今律より此地名を加へたり  
按今律より通音あり  
 其後奥列武衛宗衡兄弟叛逆の時も義家朝臣鎌倉鶴  
岡をより此社八幡宮等より祈願ありて賊徒を亡し勝利あり故永保元年  
辛酉兩社の修造を加へられ行基彫造の弥陀を以ての本地佛とて又同作の  
茶師をより慈覺の作の觀音等の像をも安置ありとあり其後文治五年  
右大将頼朝公奥列の義衛追討より進發の時も此神より新誓ありて勝利  
を得ありて建久元年庚戌下河辺庄司行平を奉行よりて宮社を重建あり然  
小寛永十三年丙子  
 台命を奉りて舟越伊豫守八木但馬守等是以司  
 王當社御再興ありより之降神光日く小新の靈威月々盛るる

今戸  
八幡宮

隅田川西岸



今戸焼

此邊醜者  
陶器通ありと  
是を産業  
と云ふ  
世よ今戸焼  
と稱す

元禄二年七月  
三音隅田河  
流り

土をらひを  
けらるるを  
ほりけり

今のねま

霧

いともい

下尾

秋風



霊亀山慶養寺

同く南の方今戸橋の北の結あり曹洞派の禅刹あり

兎山を明山良察和尚といふ

昔い鳥越西福寺の隣あり後本堂より

の二字の願齋の筆れを辨財天社境内よりあり本寺の弘法大師唐より携来の

霊像ありといふ

真土山

今戸橋の南の結ありまご待乳又作を或信土又作を万葉集亦打

今宵まご誰有ゆるん庵崎の隅田河原の秋の月妙多

亦打山暮越行而廬前乃角太河原爾獨可毛將宿

建保名所百首

月影のさそや菴崎すまご河紙てまらちや山の妙ひよ

誰よゆもやういといひまらち山夕紙行のあふ人もれ

ほほら山夕紙行の風寒そすまた河原ふも鳥れくる

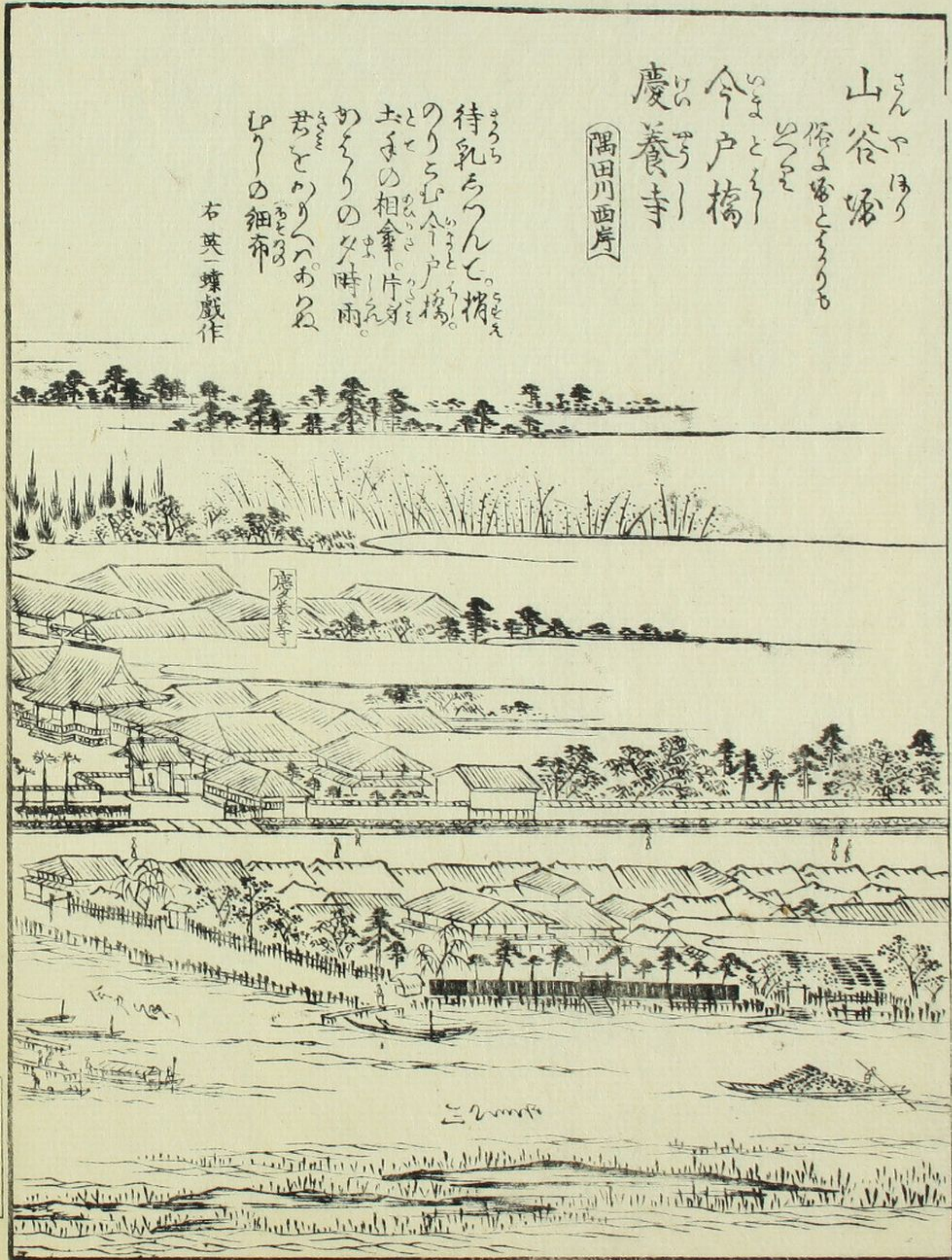
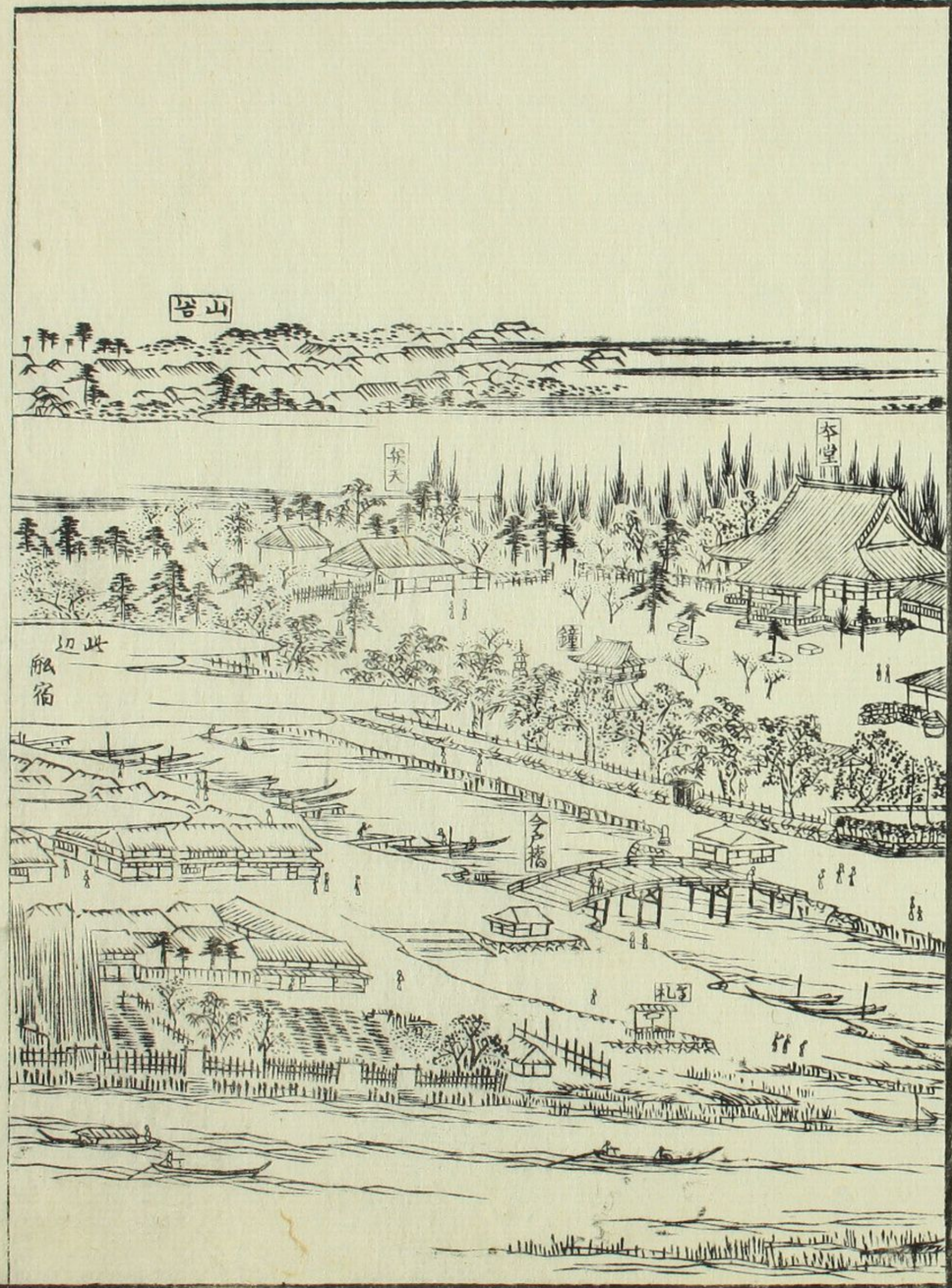
回國雜記 道中名所百首

まらち山夕紙行

道中名所百首

のりそそそのりゆをるぬ東路のまらちの山夕紙行のあふ人もれ

道安准后



さんやほり  
山谷塚

俗に塚と云ふも  
いづれ

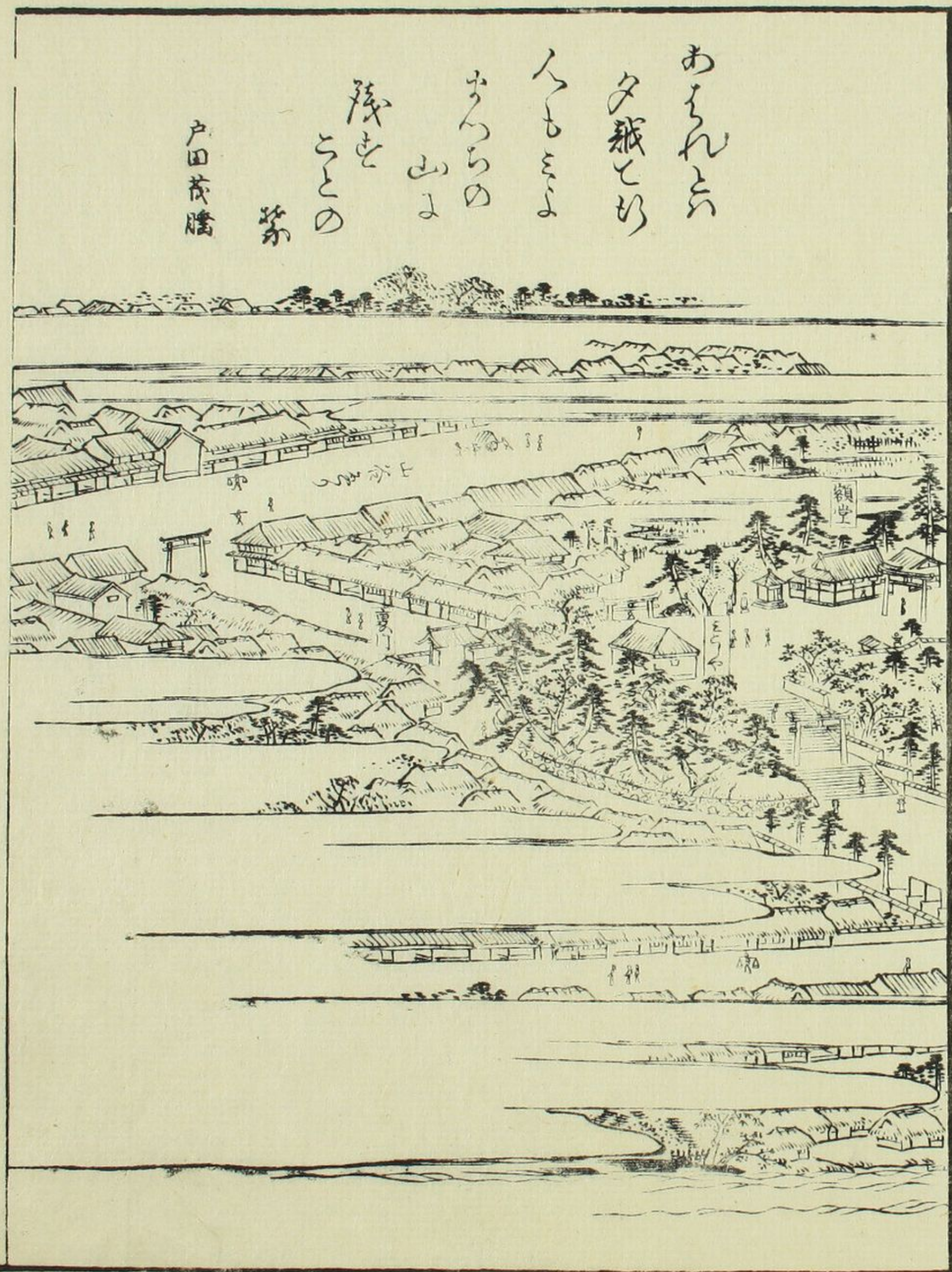
いまとく  
今戸橋

いづれ  
慶養寺

隅田川西岸

待乳ちんて、梢  
のりらむ今戸橋  
お手の相傘片  
あそりの夕時雨  
君とりのへありぬ  
ひりの細布

右英一棟戲作



戸田茂膳

紫

この

後

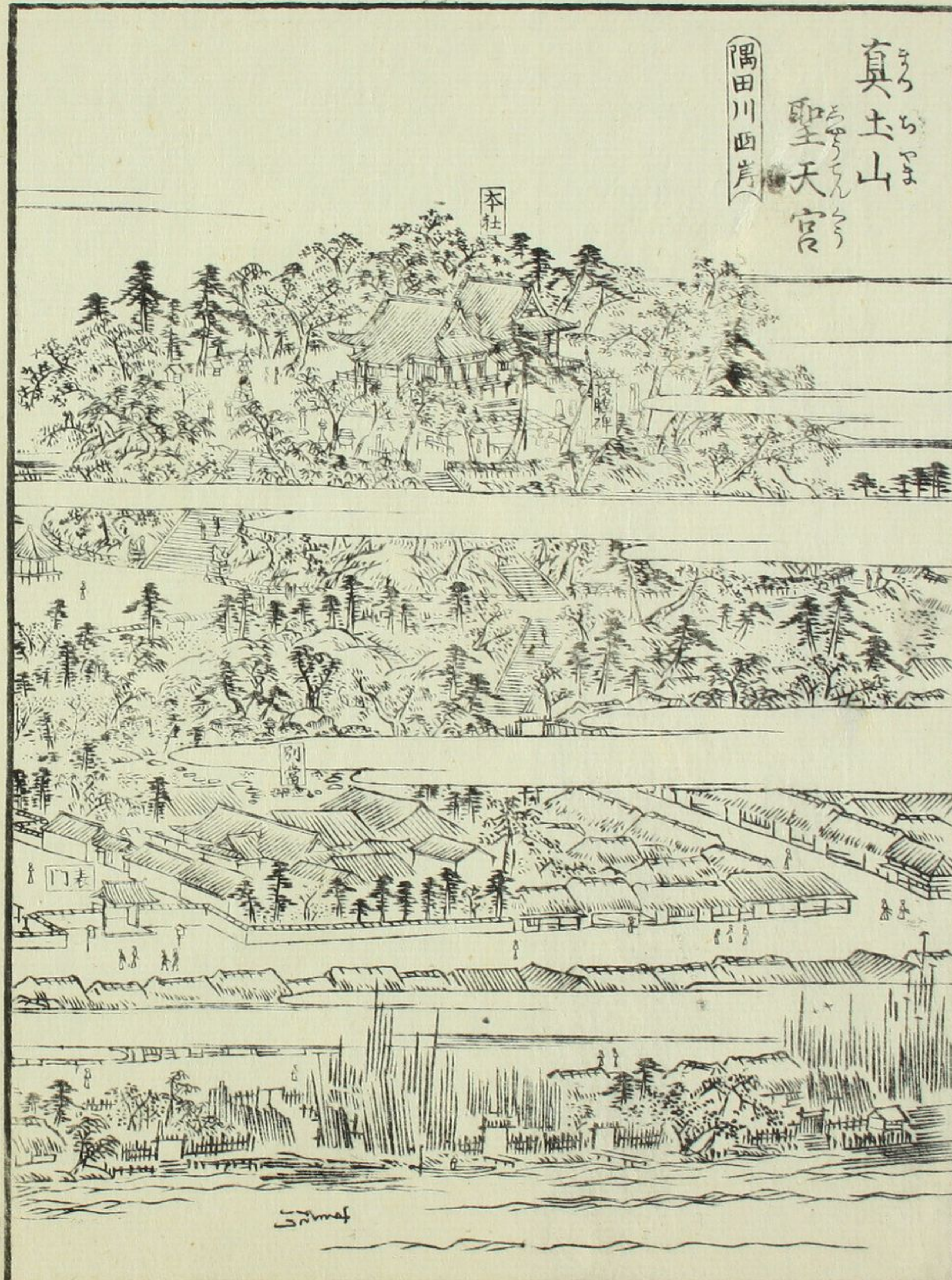
山

の

人

夕

あ



隅田川西岸

真土山

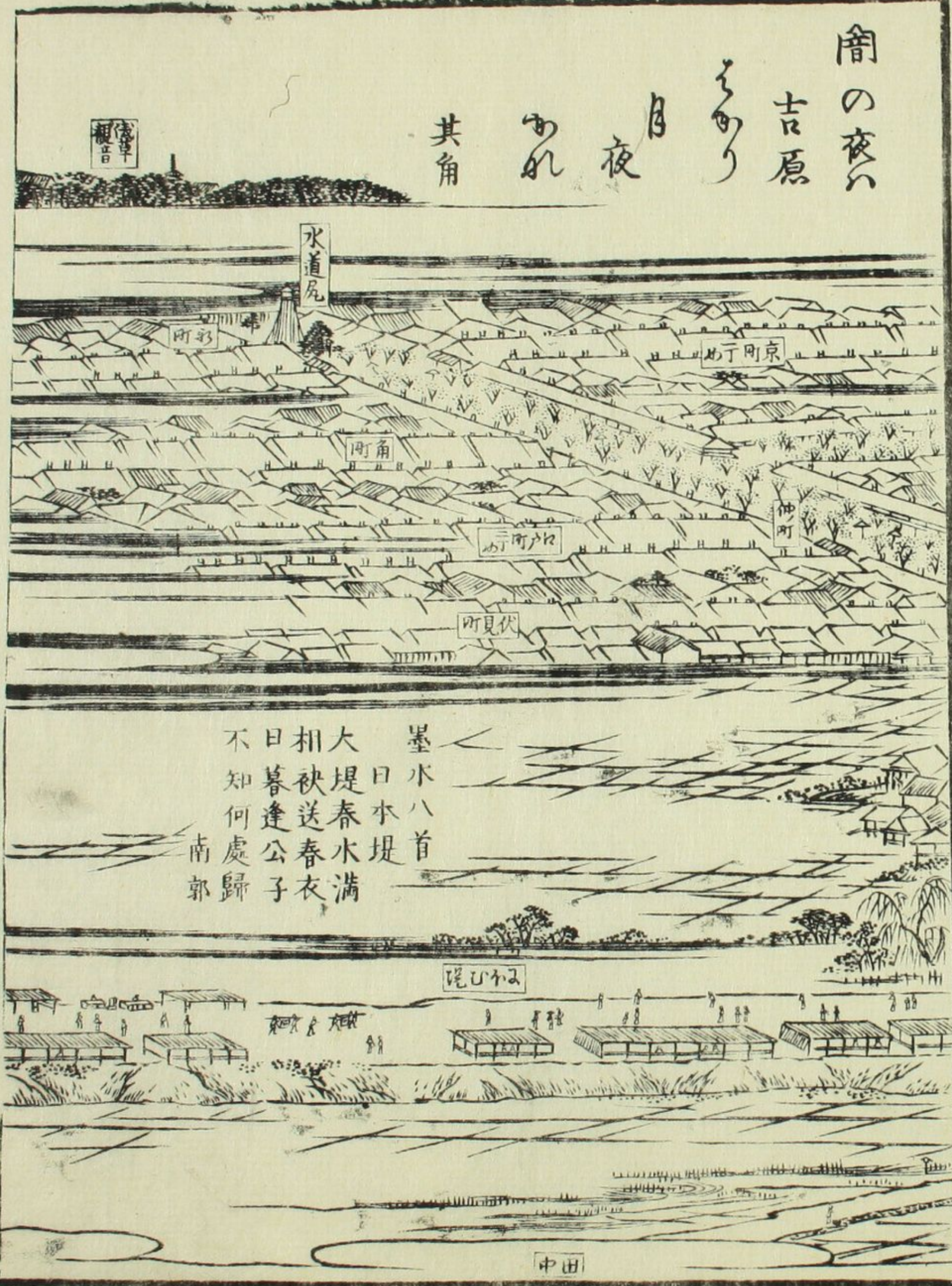
聖天宮

本社

三







南の夜の

吉原

月あり

夜

あれ

其角

観音

水道尾

町京

町角

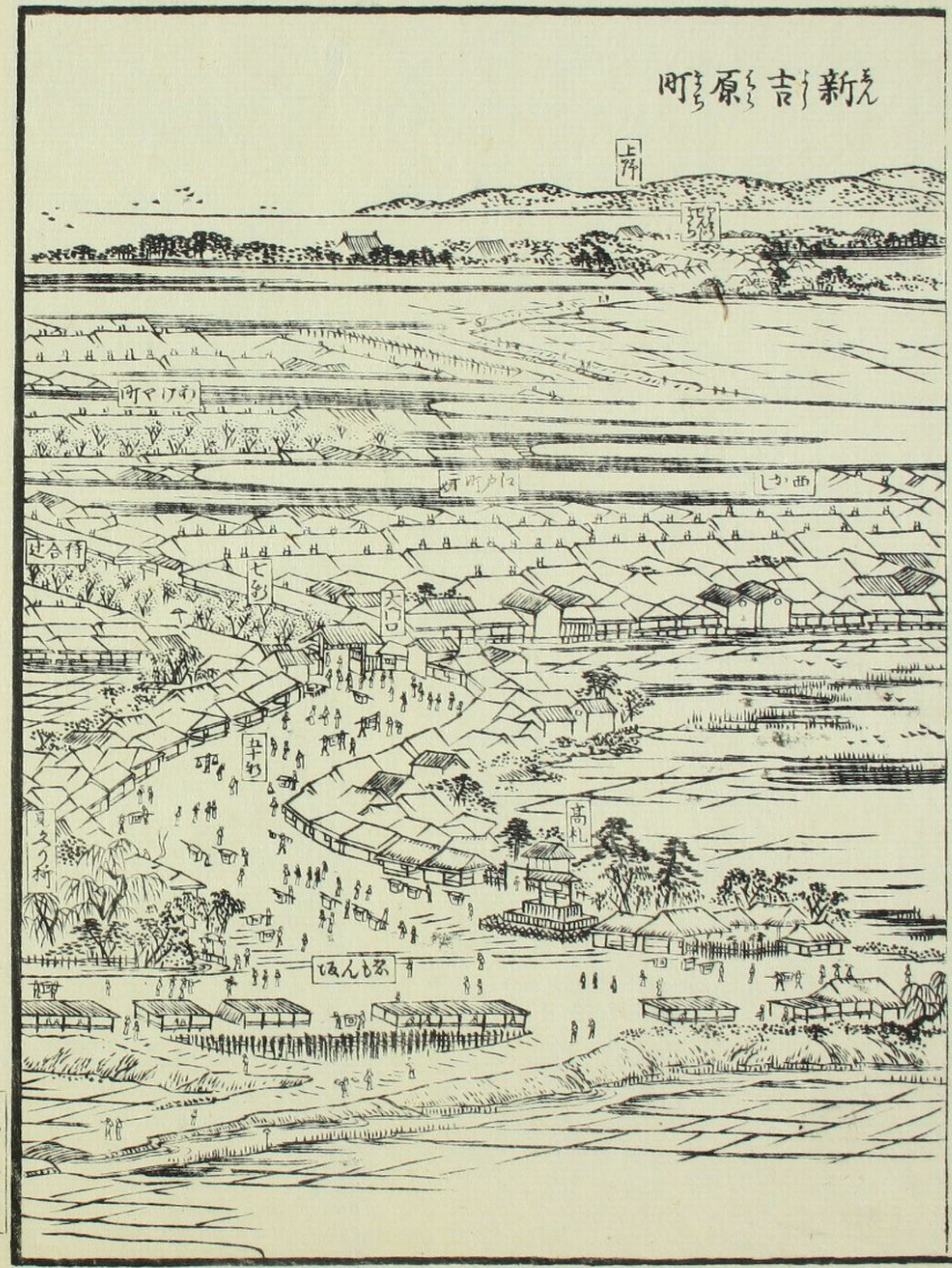
町六

町見伏

墨水八首  
 日水堤  
 大堤春水満  
 相袂送春衣  
 日暮逢公子  
 不知何處歸  
 南郭

堤ひがし

中田



新吉原

上

新

町マ

町六

町西

町合

七

大

高

はん

町

中



四方の地を賜ひ是れ吉原町と号す  
今所謂和泉町高砂町住吉町難波町等其地なり  
あつちを賜ひ故に霞塚ともいふ八ヶ丘を賀して吉原と作るといふ或ハ事跡合考を以て  
元禄元年の江戸産子等の書に其始發別えはあつちと号す故にこの号ありと云ふ  
 落成と然るに江戸益繁界一ノ人花夢をなれハ明暦二年の冬竟る今ノ  
明暦二年丁酉 依て新吉原所と号すといふに花柳のまこと  
八月今の地より  
 小三都の魁乃を其賑ハ特殊生の花の頂をりて勝たりとて春宵一判の價  
せんま  
 千金を顧と初秋の燈籠ハ万字屋の玉菊ハ追福よりまを八朔の白重ハ  
とみ  
 巴屋の高橋よ起る今も粧目をりて更衣の節とを名す小三度の月又ハ  
せんま  
 全盛ハハもさうらふと悉く其美を譽ふといふもあつちと号す  
せんま  
 是を界と

江戸名所圖會開陽之卷終

王子橋山町  
 成内頴一郎

